

ピエール・ロチ「倦怠の華」翻訳と注（下）

遠 藤 文 彦

はじめに

以下に訳出するのは、ピエール・ロチ『倦怠の華』所収の中編小説「倦怠の華」のうち、本稿（上）¹（中）²につづく箇所、小説の結末を含む最後の五分の二ほどの部分である³。

本稿（中）で訳したロチの語る「カスバの三人の女」という「東洋風の小話」のあと、この最後の部分の約半分を占めるのは、ロチの対話相手であり、作品の「共著者」H・プラムケットによる、なかば写實的、なかば幻想的な中国紀行（あるいはむしろ中国譚）である。ロチは、作品が発表された1882年の時点までに中国滞在の経験がないので⁴、この中国に関する記述は、内容的にプラムケットことリュシアン・ジュスランによるものと考えられる（彼は1873-74年に極東に遠征しており、その際中国を訪れている）。本作品がロチとプラムケットの「共著」とされる実質的理由がここにある。作品そのものの書誌情報については、あらまし本稿（上）（中）で述べたので、ここでは最後にリュシアン・ジュスランについて一言触れておこう⁵。

ロチと同じく海軍士官であったリュシアン・エルヴェ・ジュスラン（Lucien Hervé Jousselin）は、1851年生まれ（1932年没）でロチより一歳年下、海軍士官学校でも1868年入学の一級下である。

二人が親しくなるのは、しかしながら入学直後ではなく、1875年以降、とくにロチがトルコから帰国した1877年からのことであった。その二年後の1879年に上梓された『アジャデ』は、その創作のみならず、出版の過程においてもジュスランに多くを負っている。すなわち、後者は、前者がトルコでの恋愛体験を綴った手記（日記）を読んで、その作家としての才能を発見し、これを発表するようすすめ、作品執筆の過程では文学上のよき助言役となり、出版社との間ではさまざまな仲介の労を取っている。

出版された当の『アジャデ』において、ジュスランはプラムケットという名で登場する。まずは、

1 「ピエール・ロチ「倦怠の華」翻訳と注（上）」『福岡大学研究部論集』A:人文科学編Vol.4 No.4、2004年。

2 「ピエール・ロチ「倦怠の華」翻訳と注（中）」『福岡大学研究部論集』A:人文科学編Vol.5 No.1、2005年。

3 原典としては、『倦怠の華』*Fleurs d'ennui*, éd. Calmann Levy, 1882所収「倦怠の華」*«Fleurs d'ennui»*を使用した。

4 ロチが最初に中国の地を踏むのは1885年清仏戦争に際してである。ちなみに、彼の中国紀行『北京最後の日々』は、1900年、義和団の乱制圧のために行われた二度目の中国遠征をもとにしている。

5 L・ジュスランについては、Bruno Vercier, «Préface» à *Fleurs d'ennui*, *ibid.* ; Christian Genet et Daniel Hervé, *Pierre Loti l'enchanteur*, Gémotac, 1986, p.174 ; Fernand Laplaud, «Un collaborateur de Pierre Loti : Lucien Jousselin», in *Revue Maritime*, numéro spécial Loti, 1950, pp.103-112などを参照。

刊行の経緯を報告する刊行者として。ついで、物語中の主人公ロチの通信相手として。さらに、第二作『ロチの結婚』でも、同じく主人公ロチの友人として再登場している。第三作『アフリカ騎兵』では姿を見せていないものの、第四作の『倦怠の華』では、作品の「共著」者となり⁶、同時に、作品中のロチの対話相手ならびに作中話の語り手として再び姿を現している。この作品における二人の共同作業については、冒頭の「刊行者による注」（本稿（上）に訳出済）でロチがその概略を紹介しているので、そちらを参照されたい。

プラムケットという、この英語風の響きをもったあだ名についていうと、その由来はつまびらかではない。ただ、B・ヴェルシエによれば⁷、当時流行っていたオペラコミックに『マルタ』という作品があって、その登場人物が「プランケット=Plunkett」という名であった。あるいはまた、その頃のパレ・ロワイヤルの支配人の名前からきた可能性もあるという。一方、H・プラムケットのファーストネームの頭文字についていえば、これはジュスランのミドルネームがエルヴェ Hervé であるゆえ、そこに由来していると考えられることはできるが、これも確証はない。

刊行されたロチの日記や、二人が交わした書簡を読むと、あえて典型的にみれば、ロチの方が情熱的ないし感情的で、感性がまさり、積極的に語る側で、プラムケットの方が冷静ないし理性的、知性がまさって、どちらかといえば聞く側、相談役に回っているという印象があるが、このことは作品中の両者の関係におおむね反映されているように思われる。この点は、上記の「刊行者による注」でも、二人の（人格ならびに言説上の）性格の相違は、むしろ意図的に維持され、さらには際立たせられている、と明言されているだけに重要だ。すなわち、「〔二人の共同作業は〕各人の気質が全体の統一性の中で消失してしまうような共同制作ではない。ロチとプラムケットは、自分たちの人となりを保持し、作品のなかに自分たちの性格のはっきりした刻印を残そうと欲した」（本稿（上）35頁）。

この問題については、当の書簡や日記を精査することによって、実証的に検討してゆく必要があるだろう。他方、本作品が全体として対話体からなるという言説上の特徴にかんがみて、二人の話者の対照性（あるいはまた対称性）がいかなる意味をもつのかを探ることも、興味深いことであろう。

ロチとプラムケット——この珍妙なるカップルへの伝記的興味もさることながら、「倦怠の華」という、この特異な小説の言説構造に対して特別な興味を抱いているわれわれとしては、ともすれば研究者の関心を独占しがちなロチの発言・発話のみならず、対話相手であるプラムケットのそれが必ずや担っているだろう言説上の意味ないし価値にも、一層の注意を払いつつテキストを読まなければならないと考えるのである。

6 正確を期しておく、「共同作業」<collaboration> がなされたところのみで、いわゆる「共著者」<coauteur> という言葉は使われていない。

7 Bruno Vercier, *ibid.* p.10.

ロチ——すると君はカナリヤ⁸だね、お人好しのプラムケット君。——さきに進もう。

ひとつ、古い台帳の話をしてやろう。ある日たまたま、家の屋根裏部屋で、先祖が使っていた櫥の木の長持の奥にあるのを見つけたんだ。

台帳は、ほこりまみれで、虫に食われた跡が唐草模様^{アラベスク}のようになっていた。

僕はなにげなくそれを開いてみた。すると驚いたことに、表紙にサミュエル・R⁹の名前が書いてあったので、それを読んでみたくなった。（サミュエル・Rは僕の祖先の一人で、その人のことはむかしその曾孫、つまり僕の祖母から何度も聞かされていた。）

なんのことはない、それは彼の家計簿だった。そこには、月毎に、日々の支出の細目が書いてあった。

「一六九三年八月一〇日、馬一頭購入、—— 一〇〇リーヴル¹⁰。

女中シュゾンの給金支払、—— 二リーヴル。

召使マチューの給金支払、—— 三リーヴル。」

つぎに製塩労働者、つまり塩田から塩を採る日雇たちの日給。それから毎年秋、葡萄の収穫のための多額の追加給金、それに葡萄の収穫祭のための高額の飲食代...僕は、かくもむかしのことでありながら、今日の僕らのそれにかくも似た日々の営みに、——そして一六九〇年の太陽の下でおこなわれた葡萄摘みに、思いを馳せた...

字はとても太く、しっかりしていて、古いミサ典書¹¹の字に似ていた。ほとんどゴシック体のようだった。

ページをぱらぱらとめくってみた。サミュエルお爺さんの人生は毎年似たりよったりで、支出がじょうずに収入と見合っていた。けれど、文字は少しずつ不鮮明になっていき、——あるところで突然、勘定書きが終わっていた。お爺さんの規則正しく質朴な人生が、おそらくこの最後のページのところでおわったのだろう。

さらに家計簿をめくってみた。白紙のページがたくさんあって、——あるところから別の勘定書がはじまっていた。こちらのは愉快的勘定書で、文字はそんなに古くはないが、子供っぽく、重なっていて、落書きや似顔絵が描いてあった。

明らかに、その無用になった古い帳簿は、何年もののちに子供たちの手に落ちて、その子たちが面白半分の勘定書を作ったのだった。

8 「カナリヤ」（«serin»）には「間抜け」「愚直」の意味がある。（以下の注においては、種々の辞書、事典、ウェブ・サイト等を参照したが、そのつど参照元を記してはいない。）

9 母方の祖母の名がHenriette Renaudinであるので、Rは「ルノダン」の頭文字。彼女の父および弟が「サミュエル」というが、曾祖父に「サミュエル」がいるかどうかは不明。

10 革命前のフランスの貨幣単位。

11 ミサのとき司祭が唱える祈りを収めた書物。

「アンリエットにピンクのリボン—オーヌ¹²、ピン三本で売った。」

「ジャネットにアランソン・レース¹³、ハシバミ十二個で売った...」

そこに記されていたのは僕の知っている名前だった。その子供たち、それは僕の祖母や大叔母たちだった（そのうち最後に残ったベルト叔母さんは九十二歳で亡くなった¹⁴）。第一共和制下の—七九八年頃、その子たちは、まったくいまの女の子たちと同じようにお店屋さんごっこをして遊んでいたのだ。

「五月二十四日、マリー＝ジャンヌちゃんに羽飾り付き帽子^{シャポー・ア・ブリューム}こしらえて、サ克蘭ボーオンスで掛売り。」

さぞかし風変わりな形をしていたことだろう、その羽飾り付き帽子は！... つまり彼女たちは帽子屋さんごっこをしていたのだ。——さらにめくっていくと、こんどは、ページのあいだに彼女たちが挟んでおいたレースの切れ端やリボンがあった、——かげりがある、濃淡をつけたリボン、いまそのまねをするのが流行っているあのむかしのリボンだ。彼女たちのおもちゃの店の品物が、一世紀ものあいだそこに眠っていたのだ、——これら百年の遺物を前に、僕はしばしもの思い耽った。僕は、少女たちの顔を、古い肖像画や子供時代に垣間見た八十歳代の顔から再構成して、その姿を思い描いてみた。すると彼女たちが、当時のいでたちで、垢抜けない小さなドレスに身を包み、額に巻いたビロードのリボンに渦巻きのような小さい巻き毛を垂らし、——旬末^{デカディ}¹⁵の休み時間に、いまよりも若かった太陽の光を浴びて遊んでいる様子が目に浮かんだ...

それから、パンジーや、スズランや、その他もろもろの春の草花の押し花を見つけた。パンジーはもとの色をとどめていたが、それを摘んだ少女たちは、その後、おばあちゃんとなり、惜しまれて亡くなって、いまはもうただの塵埃と化してしまっていた...

まだあった、蝶の押し型だ！——子供がよくやるやり方で、少女たちは蝶の羽を油紙に挟んでおいたのだが、そこにその蝶の形と色がついて残っていたのだ。

それは、空色蝶¹⁶と、黒にピンクの羽をしたシャク蛾の一種で、寿命が短く、五月の夕べに、花の咲いた背の高い牧草の上を飛んでいるやつだった。——みずみずしくて、まるできのう採ったばかりのようだった...

それらを見つけたのも、とある五月の夕べのことだった。夕陽が、窓越しに、その古い台帳^{よわい}と齡百の花々を照らしていた、——僕は、柔らかく風変わりな色彩のもとに、いまは亡き春の日々を、永遠の虚無の塵に埋もれたあの春の日々のことを思い浮かべていた...

僕はね、プラムケット、あの神聖な台帳のほこりをうやうやしく払って、自分の部屋にもって帰っ

12 生地の高さを測るのに用いられた単位。1メートル強。1837年に廃止。

13 六角形のメッシュを用いた繊細で丈夫なレース。アランソンはノルマンディー地方の商都。

14 母方の祖父（アンリエット・ルノダンの夫）フィリップ・テクシエの姉ロザリーは92歳で亡くなっている。

15 <décadi>：革命暦旬日の末日。カトリックの週末日である日曜日に相当。

16 不明。

たんだ。そいつはいま僕の書き物机の中にある。

その後、僕は何度かその台帳をひもといてみたけれど、でもそうすると、それを萎れさせてしまうのではないか、そう頻繁に開けると、黄ばんだ羊皮紙のなかで眠っている昔日の五月の魅力が、ページのあいだから少しずつ飛び去ってしまうのではないかと思って、ほんのたまにしか開けることはなかった…

ブラムケット——ロチ君、君がいま贈ってくれたのは、はからずもきれいでみずみずしい花だった、—— 齢百の花ではあるけれど。

もし僕らに、受け取るや否や花びらをむしって、お互いの顔めがけて投げつけたりする習慣がなかったなら、たまには僕も、あまり萎れていない花を贈ってみたいものだ。

さっき僕は君に、非常に興味深い生理学の理論を講じていたね。すると君は、それは骸骨だ、身の毛がよだつ、と声高に叫びだした。それから僕の話のをさえぎって、僕に結論をいう間もくれずに、退屈きわまりないアラビアの小話をはじめたのだった。

「われわれは機械だ」と僕はいった、——もとよりこれは、まったくもって僕が大好きな人物のひとり、ラ・パリス氏の名にふさわしい真理¹⁷ではある。

けれども、僕らはただそれだけのものなのだろうか？…ここはつねに恐ろしい疑問符のつくところだが、しかしながらそこにとどまらないようにしよう。一切のことに思いを巡らせたのち、僕らの思考がそこに立ち止まり、穏やかに休息できる他なるものの観想の域にまで、おのれを高めてみようじゃないか。

思考、そして愛を分泌するその機械は、幸いにもいまだに解明されてはいない。観察可能な脳の諸現象を離れ、思考ないし意欲といった意識の諸現象に向かおうとすれば、両者のあいだにはつねに、理解不能なもの、深淵が見出される。

なるほどそこで現代哲学は、精神的現象ならびに心的現象は、同一のことがら、すなわち人間存在の活動の客観的および主観的というふたつの面なのだという。だが、なにかしら理解不能なものを簡潔な公式で表わしたからといって、ひとはそれをよりよく理解するといえるのだろうか？

はたしてつねにこれが、あらゆる哲学、あらゆる科学の最後に到達する地点なのだ。すなわち、〈把握しえぬもの〉、〈理解しえぬもの〉、〈認識しえぬもの〉が僕らの精神に対してとりうる最も広大な形態…

僕らは僕ら自身の内面を底の底まで穿ってはみるものの、底の底に達するや、苦痛をとまなう反動で、子供じみた推測のただ中でもがくことになる。

けれども僕は、その現代哲学というものを君がいうほど無益なものだとは思わない。それは少な

17 <La Palice>. イタリア戦役で多くの武勲を挙げた元帥。「ラ・パリスの真理」とは「自明の理」の謂。彼の勇猛さを讃えたシャンソンの一節「彼は死の寸前まで勇敢に闘っていた」の字義通りの解釈「彼は死の寸前までなお生きていた」に由来。

くとも、僕らが完全に無知であること、そしてその無知を脱しえないということを、厳然たる事実として確認させてくれる。

じつに、それには然るべき意味があるんだよ、ロチ君。だって、それは心と想像力を受け入れる無限の領域を残してくれるのだから。それは、おそらく神であるところのあの〈認識しえぬもの〉という概念を肯定するものなんだ！…

宗教は、この認識しえぬものに対する感情に由来している。宗教とは、認識しえぬものの粗雑な、あるいは素朴な解釈なのであり、それは人間精神の進化の諸段階に対応している。完成された存在である僕らの精神は、宗教を超えており、宗教の神々には満足しない。だが、過去の宗教が試みた以上に人間の理解力の限界に近づいてみると、僕らの前に立ちはだかる、超えがたく謎めいたそれらの限界がよりはっきり見えてくる、——その彼方には神がいるにちがいない。真の神は、キリスト教徒がいうよりもっと高く、もっと遠いところにいる。ただし知っておくべきは、神がいらないということはあるえないということだ。だからキリスト教徒のようにしよう、すなわち、神を崇めよう。

ねがわくは、以上の結論が君の疑念、君の苦悶を和らげるのに役立たんことを。俗なることどもの上へとおのれを高めたまえ、そしてそれら美しい観想のうちに身を休めたまえ。君はそこに、いつの日か君をして人生を愛さしめてくれるかもしれぬ、心なぐさむ魅力を見出すことだろう…

七番目のタンポポ

ロチ——夢を見ていたよ、プラムケット、君が穿頭術を受けている夢だ。手術をしているのは艦の船大工で、指示を出したのは僕らが助言を求めた精神科医だった。

僕は君に付き添って、友人としての勤めを果たしていた。手術中、君の話し相手になり、言葉で励ましてやっていた。——君の頭部はなにやら虚ろでひびの入った音¹⁸を立てていた、——割れたココナッツみたいだね。

穴が開くと、開口部から大きなゴキブリの二本の触角が見えた。君の灰白色の神経塊に巣をつくっていたんだ。そこで、そいつの出立を邪魔しないよう、僕と執刀医はそっとその場を離れた、——するとその生き物が外に出てきた。

そいつのあとに二匹目が出てきて、さらに三匹目、ついで四匹目、そして十匹目が… ——ついには数え切れないほど出てきて、クモまで出てきた。

「ああ！すっきりした！」と君はいった。じっさい君は、ある程度筋が通り、常識さえ備えた考えを口にするのだった。

そこで僕ははげしい驚きの感覚に襲われて眼が覚めた… 夜の当直に疲れて士官食堂^{カレ}で寝入ってしまい、座布団の上で横になっていたのだ。君は左舷の近くで、君の話に聞き入る他の数人の士官

18 「頭部」<tête>、「ひびの入った」<fêlé>とあるが、「頭にひびが入っている」<avoir la tête fêlée>で、「少々あたまがおかしい」の意味。

たちに囲まれて座っていた。

カントとスピノザ、純粋理性と実践理性の話だった…。そこでようやく僕は、自分が夢を見ていたことに気がついた…。

プラムケット、先刻君は、至上の哲学はつぎのふたつの命題によって要約可能であり、万人の理解に届きうるという話をしていたね。ふたつの命題とは、「われわれはなにも分らない、われわれはなにも知らない」というものだ。

わが師よ、まったくその通りだが、ただ、そんなことなら僕らはずっとむかしから知っていた。——そして、このふたつの真理に心なぐさむ魅力を与えるべく、それをどんな美しい衣で包み、そこにどんなつけ鼻やつけ髭をつけようとも、結局のところそんなものは虚飾にすぎず、まがい物にすぎないのだ。

わが国の某沿岸部に、砂で覆われた大きな島がある。景勝の地などとはとてもいえないところだから、ここで長々と描写しようとは思わない。

松林があって、そこを潮風が吹きぬける。天日塩田では、暑い夏の日、ていねいに掻き採られた塩の、雪のように白い塊が、地元の農民に「スマレの匂い」と呼ばれ、じじつ野生のスマレのそれに似た独特の香りを放っている。そしてヒバリが、おびただしい数のヒバリが空高くを舞いながら、一年中、声を限りに、陽気にさえずっている。しばしば西からの大波に打たれ、掻き回される広い砂浜。砂丘の上には、スターチスとカーネーションのピンクの絨毯が非常に強においを放ち、その芳香は遠くまでとどき、沖ゆく船にまで達する。漁村の小さな家々はどれも低くて、まるで大西洋から吹きつける疾風を恐れて地面にうずくまっているかのようだ。アラビアの村のように石灰で真っ白に塗られた貧しい村々は、凜として、ほれぼれするほど清潔で、ニオイアラセイトウやバラ、その他の小花が、いたるところ、これまた白い静かな路地の敷石のあいだに生えている。男たちは太陽と潮風に焼かれて黒い。人の好い老女たちは高く白い被り物をかぶっている。——すべてのものの上に、単純で、控え目で、質朴な誠実さの魅力がみなぎっている。

こうした細部は、君の哲学と比べれば、いかにも子供じみているだろう？…。

プラムケット、いま僕がかの地に思いを馳せているのは、僕がかつてもっとも強烈な宗教感情を抱いたのが、ほかならぬかの地においてだったからだ。そこはわが一族の故郷であり、じじつ僕は子供の頃、わが家の塩田があったかの島にときどき連れて行ってもらったものだ。そこはいくばくか新教徒の土地であって、やはり新教徒だったわが祖先たちが、とある小さな私有の囲い地で永遠の眠りにについている。異端の家は教会の周囲の墓地には入れてもらえなかった当時のこと、それが習いだったんだ。

子供の頃、自分がキリストという名のかの輝ける人物のもっとも近くにいたと感じたのは、そうした片田舎の小さなお堂——村がそうであるように、ごく素朴で、どこまでも白く、陽の光をいっぱいに浴びたお堂——でのことだった。

それからまた、ある一枚の彩色画のことを思い出す。幼年期の僕にとってかけがいのない絵、世界一きれいな本の世界一きらびやかな彩色挿絵よりも好きだった絵。そこには、石に腰掛けて、裸足のヘブライ人の子供たちを招き寄せているキリストが描かれていた。下の方に、つぎの福音書の一文が書かれてあった。「子供らを私のもとによこしなさい。¹⁹」——キリストの背景には、カナーンの地の風景が描かれていた。草木も生えぬ、石ころだらけの土地、暖かい光の中に漂う、うち捨てられたような、いい知れぬ憂愁、これがユダヤの地なのかと分からせてくれた、名状しがたい雰囲気... 大人になって、聖書に描かれたの地をこの眼で見たとき、そこに僕は、かねてから思い描いていたあの憂愁とあの光を再び見出した。子供時代の絵の中の国が、まさに目の前で息づいていたのだ... ただしそこには、もはや信仰心がなかった。そしてそのとき、しばし僕の想像力に取りついていたのはイスラムだった...

ねえブラムケット、イエスとイスラエルの子供たちを描いたあの絵の、なんと美しかったことか！ベツレヘム、ゲッセマネ、ゴルゴタといったあれら崇高な名前の、かつて、なんと輝かしい光を放っていたことか！...

大人になりかけたとき、せっかくのそのキリストの姿が、愚痴っばい説教師や、ばかげた書物や、かの光り輝く人のあとをだらだらとついて歩く生気のない一団のせいで、たちまち台なしになり、わけの分からないものとなってしまった、——そうして僕は肩をすくめた。その人を、その種のがらくたの山と下らない人物たちから救い出し、美しく純粋な姿を取り戻し、いちど打ち砕かれた神にふたたび讃美の念を捧げることができたのは、それからずっとあと、大人になってからのことだ。

僕は人生のまた別の時期に、またしてもそのキリストを、より異教的で、より謎めいた姿のもと、ブルターニュの田舎にある御影石の教会で見出した。——ああ、ぶなの森の中で、隔絶され、謎めいた、あの古い小さな礼拝堂、イヴ²⁰とタベの散歩の途中、道端で見かけたキリスト受難群像²¹... いったいこれらすべては、空ろで、虚しいものなのだろうか？... いまはただ、幾世代にもわたる祈り、死者たちの祈り、安堵もしくは苦悶から発する祈りが、夕刻、靈魂のように、いく星霜を経た御影石のまわりを漂っているだけなのだとしたとしても...

キリスト教の殉教者の話はすまい。あの人たちの時代は、僕らの時代よりずっと若かったのであって、いまの僕らには、彼らのことはもうほとんど理解できないのだ。

そうではなくて、まさしく僕らのこの世紀において、——僕が思うのは、けがや、熱病や、伝染病や、淫蕩によって命を失ったあの流謫の男たち、僕らの仲間、あの若者たちのことだ。僕は彼らのなかでも、君のような哲学者風情が、恐ろしい臨終の苦しみに手をねじまげながら、末期の苦悶と格闘するのを見てきた。一方、あわれな水夫たち——彼らは単純だ——は、キリストに向かっ

19 新約聖書「マルコ10章14節」

20 部下のピエール・ル・コール Pierre Le Cor のこと。『弟分イヴ』の主人公。

21 ブルターニュ地方に見られる、キリスト磔刑像に関連する人物を配した石像群。

て手を差し伸べながら、心静かに、〈恐怖の女王〉を前にして、子供っぽい祈りを唱え、いわく言いがたい微笑を浮かべて、虚無へと旅立っていくのだった。

なるほどこういったことはみな、僕らに哀れを催させるばかりだ——けれども、その代わりになるものを提供しようなどとは思わないでくれ、——君の退屈な哲学なんかで僕を煩わせないで欲しい...

ブラムケット——哀れなロチよ、君の話はぜんたいがじつにミューセ^{ミューセ}的だ、じつにすでにどこかで聞いたことのある話だ。——あまりにミューセ^{ミューセ}的でさえある。が、まあそこは許そう。いつも同じことをくどくどと繰り返さないためには、人は人であることを止めないといけない。

ただ、君も分かるだろうが、哲学上の陳腐と同様、詩における陳腐というものがある。一言でいえば、一切は陳腐に至りつくということだ。

ロチ——僕の空はね、ブラムケット、もうずっと遠いむかしのことだが、僕の子供時代をやさしく照らしていたあのキリストの姿を見失ってしまったときから、いやましに暗くなっていくばかりだった。

いま僕は、つとめて単純至極な仲間と付き合うようにしている、——健康な植物のように、すくすく育ち、果実をつけ、時がくれば心穏やかに死ぬことのできる連中だ、——単純な人々、単純なものごと、それによって僕はふたび活力を得、疲れを癒すことができる。複雑きわまりない人間であったこの僕が、いまやこの上なく原始的な生き方へと徐々に回帰しつつあるというわけだ。

じつにうんざりさせるね、君とか僕みたいな人間は。——僕が友として選んだ単純な連中の生活と比べると、僕らの生活はなんと異常で、無益で、変てこなんだろう...

ただし残念だが、もう遅すぎる。彼らのように、ありのままの健全な人間になろうたって、それはもはやかなわぬこと。どうやってみても無理だ、彼らの素朴な世界では、僕はいつだってわざとらしい芝居を演じる落ちこぼれなんだ。いつだって僕には、彼らの頭越しに、彼らには見えない暗い深淵が見える。——そのとき僕は、僕をいまの僕たらしめた人々と偶然とを、わが胸中のありったけの苦々しい気持ちをこめて呪うんだ...

愛もまた然り。僕は、単純でありつづけた人々が愛を感じるようには、それを感じることができない。僕の場合、そこに、なにやら気味の悪い不吉なものが紛れ込む。——来世^{ミューセ}をめぐる懸念、一切の終わりに立ち会うという苦悶ないし不安といったものが..

ああ！君は不可知について語る！... ——だが、かのいまひとつの神秘、すなわち美しいもののもの万能の魅力とは何なのか？... それらの魅力はどこからきているのか？それらは何者の似姿なのか？——けっして定義されることのないかのもの、すなわち美とは何なのか？時代を超え、永遠に讃嘆すべきものでありつづけるギリシャの立像、ヴィーナス像、フリユネ^{フリユネ}像、古代の女たちの上半身像、あの大理石の彫像たちに差す後光とは何なのか？

22 前4世紀後半のアテネの芸妓。

ひとり地上の女たちの若さ、目で見、手で触れることのできる美しさだけが人を欺かない、…僕はこの形態、もっとも力強く、もっとも万人にとって明らかなこの〈不可知〉の形態以上のものを望まない、——そして、それを讃美する…

さらにこの賛美の念は、たんに物質的なものではなく、ときに無限と神の観念を与えてくれる至上の、崇高な感情だ。——靈魂が存在するとして、その存在をもっともよく理解しえたのは、そして僕の肉体と合体したそれをもっともよく感じえたのは、愛においてなのだ…僕は彼女たちに何を望んでいたのだろう、僕が愛した世界各地の女たち、——ときに野育ちの哀れな女であったり、——あるいはたんにその美貌ゆえに道で拾った女であったりした——、あれらの女たちに、僕はいたい何を望んでいたのだろうか？はたしてその美しい姿形だけだったのだろうか？…否、断じてそれだけではない！なぜなら彼女たちを愛していたとき、その愛ゆえに、一緒に死のう、彼女たちに神を信仰させよう、そして来世に連れ立って行き、そこで永遠にひとつになろうと思ったのだから…

過去をふり返り、自分が愛した女たちの姿をふたたび記憶の中に見出すとき、彼女たちのこと、そして彼女たちの眼の愛らしい表情、彼女たちゆえに愛したその国の魅力、僕らの信仰の夢、永遠の生の夢、それら一切を忘却しえたことに、僕は困惑する。困惑して、人間の虚しさを知る。そして、自分というこの惨めな存在が何であるかを、おのれの渴望するかのなにものかを見出しえず、この胸に抱くことのできない存在、——〈不可知〉に近づけず、——永遠なるものに達しえない自分という存在が何であるかを理解する…

²³愛！…つまるところそれは、すべてが崩壊したのちになお残りえたもの。それなくしては一切が暗く、死に絶えてしまう愛。——事物の様相、国々の様相を一変させ、貧困を甘美に、繁栄を毒あるものにした愛…地球上のいくつかの国々に、僕が人間の言葉で必死に理解し、固定し、翻訳しようとして果たせなかった神秘的魅力を注いだ愛…要するに、僕は愛によってしか生きなかったということだ。人生において、僕の眼には愛のほかもうなにも見えない…

そして、わが青春の尽き果てる前に、僕を、僕がいま愛している女とともにひとつ同じ穴に埋めて欲しい、僕が彼女において掻き抱こうとしているこの〈不可知〉の形態がまたしても逃げ去ってしまわないように、そして僕が空虚の中に転落してしまわないように。彼女への愛が途絶えてしまわないように。——時がなしくずに僕らを衰弱させ、消滅させてしまわないように。

23 以下、六パラグラフ目の最後「と思うのだ…」までは、1878年7月15日付けロチのブラムケット宛て書簡の一部を採録したものとされている (*Journal intime I*, Calmann-Lévy, 1925)。二段落目の「僕がいま愛している女」とは、ロチがボルドーで恋に落ちた女性のことだが、彼女の身元に関する詳細は不明。しかるに、この恋愛事件が起きたのは、1878年ではなく、「倦怠の華」が発表される数ヶ月前の1881年末か1882年初めである。この事件について最初の言及が見られるのは、1882年1月21から22日にかけての夜に書かれた日記 (*Cette éternelle nostalgie*, La Table ronde, 1997, p. 89) においてである。ちなみに、*Journal intime I* で1878年7月29日付とされるこの件に関するブラムケット宛の手紙 (p. 13-15) は、実際には1882年2月13日に書かれている (*Cette éternelle nostalgie*, p. 90)。1886年、ロチはこの女性に再会しているが、同年7月8日の手紙には、最初の出逢いが「四年前」 (*id.*, 234) であったと記されている。最後に付け加えると、問題の1878年7月15日付けとなっている手紙は *Cette éternelle nostalgie* には収録されていない。結局、問題として残るのは、この手紙が架空のものなのか否かということ、そして、この恋愛事件の日付がなにゆえに変更されたのかということである。

あれこれと試すのに疲れ、抱擁すべく腕をひろげるのに倦み果てた僕は、まだ若いうちにともに死ぬことを、ともに墓に入ることを、喜んで承知しよう。それは一切に終わりをもたらすだろう、そして僕はかくのごとき終末を愛するだろう。

ただ望むらくは、その前に彼女の美貌がいかなるものであったかを後世に示すため、その容姿を大理石に刻んで残して欲しい…。そして陽に照らされた石膏のように、すこし琥珀色がかったその大理石に、僕は彼女の眼を縁取る黒い線を引くだろう、——アラビアの女たちの黒く塗った睫毛よりも濃い彼女の睫毛の影を写しとるために、——彼女の眼差しの中であって、僕が感嘆しつつも言い表しえないあのなものか、たぐいまれなる甘美な、——なにより間近で、触れるほど間近で眺めたときには甘美な——あのなものかを表わすために…。

墓穴のなかでは、彼女を僕の上に横たわらせて、彼女の体が僕の体を通して腐ってゆくようにしてほしい…。ただし、死人でいっぱい墓地、亡骸がみないっしょくたになって腐ってゆくような場所はごめんだ。そうではなくて、森の中のどこか、僕ら二人きりで土に溶けてゆき、草木の根、枝、苔の中へとしみ込んでいけるようなところにしてほしい。

いま書いたことは、ブラムケット、またしても陳腐だ。それは、僕らがこの世に生を受ける前にすでに口にされ、いく度となく繰り返されてきたことだ…。だが、どうしろというのか！使い古しのいまの時代に、なにかしら新しいこと、なにかしらすでに万人の使用済みではないことなんて、考えることもできない…。僕はこうしたことをひしひと感じるだけに、せめてそれを、この世を生きた過去の先人たちよりも鮮烈に表現できるようになりたいと思うのだ…。

.....

キリスト… この名前を最後に口にした日のことは、いまだに覚えている…。

それはスタンプールに滞在していたときのこと。そのころ、あるイスラエル人の浮浪者²⁴を家に置いてやっていた。人生を賭し、故郷を捨てて僕についてきた可哀想な男だ…。しばらくして、——あるとき意地の悪い心地がして、——どういうわけか、そいつを追い出してしまったんだ。

家を出るとき、そいつは僕に苦悶にみちたまなざしを向けてよこしたのだが、あのまなざしはいまでも忘れられない。そして戸をくぐる前に、自分の着ているコートが僕のだということを思い出して、それを床に脱ぎ捨てていった。冬の朝のことだった。十二月の寒さの中、あいつは貧者のようなみなりで、決然と、後ろを振り返ることなく去っていった。

ところが、あいつが遠くまで行ってしまうと、僕は自分がいまスタンプールでひとりぼっちであり、あの追い払われた召使の男がこの土地で僕の唯一の友であったのだと感じた。なにより、自分の意地の悪い仕打ちに対する後悔の念が沸いてきて、胸を締めつけられる思いがした。

24 『アジャヤド』に登場するサミュエルのこと。モデルは、1876年、ロチがサロニカで出逢ったマケドニア人の船頭ダニエル。

向こう側の、この大都会の反対端²⁵にある故宮²⁶の船着場に、彼の故郷であるサロニカ行きの船が停泊していた。とっさに僕は、あいつはそのどれかに乗船するにちがいないと思い、間に合わないかもしれないという不安にかられながら走って家を出た。

船着場に着くや、顔見知りの船頭やら船主やら、だれかれかまわず聞いてまわった。だれも彼を見たという者はなかった。

その中にひとりあいつの友達^{シナゴグ}がいて、言った。「バラタ^{ラビ}会堂のエゼキエル師に聞いてみたらいい。あの人はあの男を可愛がっていたからね。たぶんあの人の家に行ったんだろう。」

バラタのユダヤ人地区²⁷に着いたときには、もう夕方——安息日の夕方——だった。その年最初のいかにも冬らしい黄昏が、死衣のように暮れようとしていた。このはじめての冷気は、突然やってきて、ものを考える力も凍りつくようだった。

鬱々たる寒さで、ひとそよぎの風もなく、空は一面灰色で、間近に迫る雪の気配がした。人はこの東洋の大都会について、遠く離れたところから、太陽の下、純白の姿を思い描いているが、そのときのそれは、鉛色の天蓋の下、驚くほど濃い黒さに浸されていた。土、街路のでこぼこの地面は黒かった。木造の古い家々、高く、膨れて、歪んで、崩れかかった家々もみな黒いか、もしくは濃い黄土色か赤茶色をしていた。この暗い老いた情景の中にあって、唯一光彩を放ち、生彩を保っていたのは、安息日の無為を遵守して、ひっそりとした路地を手持ち無沙汰に逍遙する、あのユダヤ人たちの衣装だけだった。

彼らは祭事用の長衣を着ていたが、その様は雑多な色の驚くべき対照をなしていた。オレンジ色の衣に黒の毛皮、空色の衣に黄色い毛皮、テンの毛皮つきの薄緑色とピンク色の衣、イタチの毛皮つきの赤い衣。

彼らはみな大市場の商人で、中断していた商売の話を小声でしたり、厚底の木靴の中に内履きををはき、道の黒土で汚れるのを恐れるかのように、明るい色のきれいな衣のことが気になるかのように、ゆっくりと散策したり、天を見上げては、その鉛色の空に、いままさに降らんとする雪を眺めたりしていた。ユダヤ人である彼らは、自分たちのことをまるで犬ころのように鞭で支配するイスラム教徒の国で身につけた、内に籠ったような腹黒い様子、ぶたれた家畜のようにへりくだった表情をして歩いていた。

道に迷ったので、会堂のあるところを尋ねてみると、訝しげな目つきで僕の顔をじろじろと見ながら道を教えてくれた。

25 この「反対端」に対してロチが住んでいたのは、エユブ（Eyup、ロチはEyoubと綴っている）と呼ばれる地区（『アジヤデ』参照）。

26 地理的に見てトプカプ宮殿を指しているようだが、厳密に言うと、故宮（Eski Saray）は、トプカプ宮殿建設以前の旧宮殿（以後はスルタンの寵愛を失った女や、前スルタンの老オダリスクなどの居館となる）を指す。Pierre Loti, Voyage, <Bouquins>, Robert Laffont, 1991の編者は、別の箇所に出てくる<le Vieux Sérail>をトプカプ宮殿のこととして注記している（p. 1474, p. 1522）。

27 <Balata>: 現在はBalat（バラト）と表記（『アジヤデ』では<Balata>と<Balate>が区別されている）。バラトを含むイスタンブールのユダヤ人地区については、Riva Castoryano, <Trajectoires dans la ville : Les juifs à Istambul>, Critique No 543-544, 1992を参照。

会堂は、いく世紀もの時を経た建物がみなそうであるように、通りより低いところにあつて、見通しが悪い。中はほとんど真っ暗だった。丸天井のひび、かびとほこりのすえた匂い。古い金の装飾具、暗闇の中で見分けのつかない、使われなくなった変てこな品々。ソロモンの寺院にあったのとおそらくそう違わない七本支の燭台が、消えかかる残光の中にそびえ立ち、いかにも象徴的器具らしい、堅く異様な外観を呈していた。壁に刻まれた碑文は、それでもってエホヴァの名が、神を意味する謎めいた三角形の中央に書き込まれる、あの太古の文字からなっていた。なにもかもがひどく印象的で、ユダヤ人の至聖所、夜、そして過去の神秘的恐怖の雰囲気をかもしだしていた。

イスラエルの祭司たちが奥のほう、幕屋のそばに座っていた。彼らにエゼキエル師のことを尋ねてみた。すると、そのうちの一人が僕を天井が低く、壁面いっぱいにはヘブライ語の文字が刻まれた地下聖堂の中へ案内してくれた。彼は呼んだ——「エゼキエル！」——白髭の老人が僕の前に現れて、尋ねた——「なんの用か？」

「サロニカの、アブラハムの息子、サミュエルの居所をご存知とのこと？」

「ふむ... そうだ——家におる。——するとお前か、あの男をお払い箱にしたというのは?...」それから声を低め、擦り寄ってきて、僕を鋭い両の眼でにらむようにしていった。

「お前はユダヤ教徒か？」

「いいえ！」と、聖書をめぐる僕のすべての記憶を蘇らせる、その思いがけない質問に身震いしながら、僕は答えた。

「では、キリスト教徒か、それともイスラム教徒か？」

「イスラム教徒」と答えるところだった。というのもトルコ帽をかぶっていたからで、イスラム教徒のふりを、とくにユダヤ人に対してするのが僕の当時の趣味だったんだ。けれども、そのとき突然、そう答えることはおぞましい罵りの言葉を浴びせることになる気がした。結局あえてそうはせず、「キリスト教徒」と答えた。こうして、奇妙なやさしさをたたえたその名前を、いま一度口にすることになった。その名前は、地上のいかなる名前にも比べるものがなく、また、もし自分に信仰心があったなら、その名前のために宣教師となってキリスト教伝道の先頭に立ち、すすんで死を求めたことだろう。

プラムケット——話を聞いているうちに居眠りしてしまったよ、ロチ。だから、残念だが、僕がまちがいない君の話にいただいたであろう関心を、いまここで君に明かすことはできない。

というわけで僕は眠りに落ちて、それから君と同じように夢を見た。

その夢で、僕は大勢の聴衆を前にして、ソルボンヌのものとおぼしきとある講義室の教壇に立っていた。

講義題目は、*テネジクネズミ*における胚形成についてだった。ご婦人方のなかには、訪問帳にノートを取っている人もいて、聴衆はすっかり魅了されているように見えた。

僕はこの成功に気をよくして、この博物学の講義中に、君に対する褒め言葉を一言添えようと考えた。ある優れた講演者が君を不死鳥に例えたことを知っていたので、架空の生物を信じない僕は、

君を風変わりだが実在の生物であるカモノハシに例えた。そいつは動物界において稀有の動物で、ちょうど君が西洋の人間界で稀有の人間であるのと同じだ。

その瞬間、僕は袖を引っ張られるのを感じ、即座に夢と現実の中間状態——思うに、君においてはほぼ恒常的であるあの状態——に落ちた。

君がかくも適切にいうように²⁸、いかなる言葉の連なりも表現しえないあの脈絡なき混沌たる幻影を通して、つぎのようなみょうちきりんな言葉が聞こえてきた——「シュイ・ディオ・コーラ、シュイ・ディオ・コーラ²⁹!...」

——いやロチ君、名産のチョコレートが出てきたわけじゃない。というのも眼が覚めてみると、そこは北京の、ラザリスト修道院の僧坊の中だった。

出てきたのは、スーチョン・チャ³⁰と呼ばれるおいしい緑茶だった。出してくれたのは、もと北京の暗黒街の盗賊王、イ・コ・イェン・ツイン³¹（一つ眼）で、最近恩赦にあずかって、ラザリスト僧たちの召使となった人物だ。

鼻にかかる歌うような言葉で、イ・コ・イェン・ツインは僕に、この季節にしては天気がいいということ（一月で、零下二十五度の寒さだった）、牧場で馬が待っていること、そしてそろそろ起きて出かける時刻であることを告げた。（昨日、僕と数人の僧が円明園^{イェン・ミン・ユエン}³²——満州族皇帝の旧夏宮——に行き、午餐を取る計画を立てていたのだった。）

談笑しながら一つ眼は、僕が着るべき服をひとつひとつ手渡してよこすので、僕は厚い毛布に包まって寒さに震えながら午餐用の服に着替えた。

行ったり来たりして、僧房の壁の一面を飾る装飾画の前を通るたびに、一つ眼はカトリック流に深々と一礼し、敬虔に十字を切るのだった。それは聖家族の図だった。中国風の髪形と服装をした、ヤギのような小さな足の聖処女が、腕に中国人風の幼子イエスを抱いていた。幼子の頭は、ふたつの小さな髷と、見事な黄色い後光で飾られていた。善良なる老聖ヨセフは、長い髭に長い尻尾のような髪を垂らし、愚直な家長らしい様子で母子を眺めていた。

やがて僕は、温かい毛皮の寝床の奥から這い出て、ぶるぶる震えながら外を見た。

なるほど、この季節にしては天気がよかった。窓からは、澄みきった空の下、伝道公園³³の一隅が見え、そこに階段状の小道があって、盆栽と庭石に囲まれ複雑に入り組んだ迷路を描いていた。ここかしこに上品な亭が立ち、田舎風の休み所が設けてあった。異様に大きな冬の赤い太陽が昇っていて、その光線が、奇怪にねじまがり絡まりあった高木の枝のあいだを突いて射し込み、朝方の

28 本稿（上）37頁のロチの台詞「それら不可解なものを言い表しうる言葉はもはや存在しない」《Il n'existe plus de suites de mots qui puissent traduire ces choses mystérieuses》。

29 意味不明（以下、中国語の発音を転写したと思われるローマ字表記の語・句・文については、福岡大学の同僚の専門家より教示を得、それを参考にした）。

30 小種茶。

31 一个眼睛。

32 北京西北、西直門から約10キロ。

33 《le parc de la Mission》 未詳。

冷たい微光が、葉を落とした裸の木々を通して広がっていた。

それは中国人が漆の羽目板に金泥で描く、あの凝った不自然な輪郭の風景画そのものであった。しかしそのときは、冷たい日の出の時刻で、澄んだピンク色の輝きに浸り、凍りついた光を浴びて、まるで魔法の世界のように不思議な雰囲気に包まれていた。

イ・コ・イエン・ツインは、そののっぺりした顔の一隅に、ほろ酔い加減の風刺画家がおぼつかない筆で描いたかのような、斜めにぼつんと刻まれた片方の眼で僕を見つめていた。

「なるほど、と僕は思った、この連中はいかなる点でも僕らと似ていない。彼らは僕らとは異なるサルの子孫なのだ。自然は、彼らの眼には四十五度傾いて見えるに相違なく、彼らの事物に対する観念も、その影響をとどめているにちがいない。」

そのとき、イタリア人神父で、伝道協会の学者であり司書であるサモルト師が僧房に入ってきた。そこで僕は自分の考えを彼に伝えてみた。

——ああ！あなた、と彼は言った、あなたはだれに向かって話してるとお思いですか？なるほどこの帝国に住まう五億人の民のうち、ざっと四億九千九百五十万人は偶像崇拜の深い暗闇のなかに生きています。しかし、彼らの誤りがそのつりあがった眼に由来しているというのは必ずしも明白とは思えません。というのも、例外はあるものの、彼らはふつう、そのふたつの目が反対方向を向いていて、必要とあらば一方がもう一方の過ちを正すようになっているからです。私の知るかぎり、誤りを正すものである神の恩寵が、みずからが触れた中国人の斜めの眼を斜めだからといって真っ直ぐにしてやる必要なんかなかったのです。それにしても、あなた、神の摂理によってわれわれの知りえないものとなっている事柄については、不遜な判断を下さないようにしましょう…

下の教会ではミサが執り行われていた。キリスト教徒の男女が、延々とつづく物悲しい哀歌調の聖歌を中国語で、順繰りに、鼻にかかった声で歌っていた。

男たちが歌いおわると、今度は女たちが歌いはじめる。震えるような細かい彼女たちの鼻にかかった歌声は、たえず音程をはずしているような、不完全な音階で響いてくるこの漠たる物悲しさを、なお一層悲しげにしていた。

彼女たちが歌っているのは、どうやら〈聖母マリアの連祷〉のようだった。^{ドムス・アウレア}黄金の堂！^{トクリス・エブルネア}象牙の塔！^{ヤヌス・ケリ}天の門！^{フェデリス・アルカ}契約の櫃！云々と、ただでさえ大仰で難解なラテン語の文句が、彼女たちのために聖務日課の中国語に訳されたものだった…

じっさいには彼女たちは、つぎのようなことを歌っているようだった——

「わたしたちは、小さいとき、男の子に打たれ、父親に打たれ、母親に打たれる。わたしたちは、おまえたちには魂がないといわれ、腰を太らすためにと、足をつぶされる。

「大きくなると、会ったこともない男のもとに売られ、かごに乘せられて連れていかれ、同衾を求められ、気に入られなければ打たれる。

そこにはまた、ほかの女たちもいて、女どうしで打ちあう。

神父さまたちは、わたしたちの夫に、わたしたちにも魂があるといい、そんなふうになつた

ちを打つのはよくないといってください。神父さまたちに感謝！」

するとドラの音とともに、すさまじい一斉射撃の音が鳴り響き、その陰鬱な旋律がかき消され、それと同時に、一つ眼がすばやく地面に顔を伏せた。聖体奉挙³⁴に際して、信徒たちが歓喜のしるしに爆竹を鳴らしたのだった。

——こんにちは、親愛なるあなた！ こんにちは、プラムケット君！

——こんにちは、神父さま！ こんにちは、^{ア ヴ エ}ウー神父！ こんにちは、^{バテル・ウー}ムシェット神父！、
^{ア ヴ エ}こんにちは、^{バテル・シュー}シュー神父！

——^{クオモド・ヴァレス}ごきげんいかが、^{フィス}あなた？ よく眠れましたか？...

——^{オプ テイメ}申し分なく、^{バトレス・カリシミ}親愛なる神父さま。

こうしたあいさつが、ミサのあとの中庭でそそくさと交わされる。中国人の神父さんたちは、つき合わせた両のこぶしを上げたり下げたりしながら、愛想よくあいさつしてよこす。僕も同じようにしてあいさつを返す。そして、長いたてがみに長いしっぽの、熊のような毛に覆われた小さなモンゴルの動物に乗る。

ウー神父にシュー神父、サモルト神父にムシェット神父、そしてこの僕からなる騎馬行列は、マーフー³⁵（馬係り）に先導され、ヤン神父の乗る食糧を積んだ荷車を従えて出発する。ヤン神父は、袖口が広い裏の付いた長衣にくるまった小太りの僧侶だ。

（^{ヤン}陽は、中国の宇宙観では、^{イン}陰すなわち女性原理と結合して宇宙を生んだ男性原理である。）

一行はかなりの速度で、鈴やら鐘をがらがらいわせながら、動物やら植物の残骸、死んだ犬やら生きている犬など、汚物だらけの曲がりくねった路地に入る。

背後には〈天子〉の桁外れな宮殿がある。その謎めいた外壁の上部が見えている。いかなるヨーロッパ人も越えたことのない壁だ。宮殿は前代未聞の光輝に包まれて、いまだまどろんでいる。そのそばで〈蓮池〉が、一月の氷の下でくすみ、よどんでいる。

黎明に目覚めつつあるこの都市の広大さを思うと、いわゆる難しい一種の息苦しさを覚える。密集し、雑然として、入り組んだ、あたりに感じられるこの迷路、ヨーロッパのいかなる首都よりも大きな広がりを持つこの迷路に、なにか胸をしめつけられるような気がするのだ。

僕らが通りかかると、犬どもが狂ったように吠え立て、馬の足めがけて襲いかかろうとするので、馬の足取りは落ち着かず、揃わなくなる。つぎからつぎと狭い路地、行き止まり、水溜りが現われてくるが、犬の群れは、噛みつきたくてうずうずしている鋭い牙をむいて追いかけてくる。

灰色のレンガ造りの背の低い小さな家々の戸口には、ついさっき起きたばかりの韃靼人の若い娘たちが何人か、もうすでにかわいい顔をのぞかせている。お月様のようにまん丸く、白と朱色で塗られた顔が仔猫の頭のように回って、僕らのあとを興味深げに追う。道行くこの西洋人のお祭り行列

34 ミサにおける重要な儀式で、聖体に変化したパンとぶどう酒を司祭が信者に掲げて示すこと。

35 馬夫。

を見て、おっかなびっくり、あっけに取られた様子だ。娘たちのゆったりした上衣、膨らみのあるズボンは、派手なけばけばしい色で、灰色の壁にくっきりと浮き出てみえる。彼女たちは、その小さすぎる足の上で、屏風に描かれた人形のようにかわいらしいポーズで、ぎこちなく身を支えている。

そうした光景が、僕らの走ってゆくのは逆向きに、つぎつぎに猛スピードで流れてゆく。それが見えなくなると、またしても人気のない通りが延々とつづく。

〈黄都〉、すなわち皇城³⁶に到着。その死に絶えたような古い街区は、どれも貴族的な雰囲気をつたえている。途切れることのない壁、壁。古びてすっかりたわみ、コケやシダにびっしりとおおわれた壁。その後方には広大な庭園があって、そこに莫大な費用をかけてこしらえた人工の自然、奇抜な中国風の自然がある。

ところどころに巨大な付け柱を配し、歳月を経て腐食した檜の重厚な扉をもつ門が口をあけている。それらの門はどれも、とてつもなく大きな屋根をのせている。黄色くて、四隅の先端が空に向かって鉤状に反り返り、しかめ面の竜や怪物の形をした屋根。どの門も一対の大理石の獣によって守られている。半ば獅子、半ば怪獣のかたちをし、鉤爪を剥いた片方の足を玉の上にのせ、通行人のほうを向いて謎めいた作り笑いをしている。

そして、これらすべての上に、隣接する砂漠の気配が感じられる。灰色に積もったほこりの層が、もとの色、もとの黄金の輝きを失わせ、いにしへの塗装師たちによってこれらヤーメン³⁷、すなわち宮殿の門に施された風変わりな雑色の塗装をかき消している。

——ここは大急ぎでまいりしょう、とサモルト神父はいう、このさは道が混雑して、遅れることまちがちなしですから。

ロチ——ああ！ まったくだ、ブラムケット、急ぎたまえ、君。まだ〈黄都〉の真ん中までしかきてないんだよ。そのうえ道草まで食ってさ。僕の記憶が正しければ、西直門^{シー・チエ・メン}に着く前に、これからまだ〈赤都〉³⁸をまるごと通り抜けなければならない。この調子でいくと、その〈赤都〉を抜けるのはどうしたって無理ということになるだろう。

ブラムケット——ここは東西に走る大通りだ。北京は街全体が地磁気の四方位にそって造られているが、それを造ったモンゴル人たちは、一度三〇分ある偏角による誤差のことは知らなかった。

つぎに僕らは、平原に通じる西直門^{シー・チエ・メン}をめざして、はしからはしまで宮殿が立ち並ぶ直線の大通りをゆく。進むにつれて、壮大な堂々たる建築物の列が、巻き上がる砂塵と濛々たる光の靄の中から現われてくる。霧氷におおわれた二列の並木が、前方に果てしなくつづいている。——道の両側には、あいかわらず同じ大きな壁、怪獣・怪物をのせた風除けのある同じ大きな門、地べたに座って道ゆく人に歯ざしりしている同じ大理石の獅子。

36 紫禁城を含む北京中心部。一般に地区としての「城」は<ville>ないし<cit  >（都、市、町）と訳されている。

37 衙門（役所）。

38 北京中心部の「黄都」＝皇城内の紫禁城（「紫禁城」は一般に<ville violette interdite>ないし<ville pourpre interdite>だが、<ville rouge interdite>ともいわれている）。

これらの衙門^{ヤーメン}は、学術院、官庁舎、裁判所、寺社、仏教の僧院、ラマ僧の修道院からなる。

ハン・リン³⁹、すなわち一万筆の学者の会所⁴⁰。リープー⁴¹、すなわち典礼法廷。ツォン・リー・ヤー・メン⁴²、すなわち対蛮族渉外省。クアン・チー・ミアウ⁴³、すなわちクアン・ユー⁴⁴の霊を祀る社。シアン・イエウ・クン⁴⁵、すなわち北極星を祀る社。シアン・ファン⁴⁶、すなわち象の家。音楽省、海軍および十八体操省、等々。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

時が経つにつれ、大通りがにぎやかになってゆく。荷車、ろばに乗った町民、毛がふさふさで、頭が大きくて、物知り馬のように抜け目なくいたずらっぽいモンゴルの小馬に乗った騎兵。

大通りには人、人、あふれるように人が出てきて、ついにはそれが人ごみとなる。

騎兵たちが、お仕着せを着た馬夫^{マフ}に引かれ、滑稽で狡猾な顔つきの小馬にまたがって、速い跑足で往来を行ったり来たりしている。彼らは長い胴衣の中でうんと身をかがめ、高い鞍にうずくまるようにしてまたがり、縮めた鐙に踵まで足をかけている。着ている服は絹地で、高価な毛皮の裏がついており、履いている長靴は黒のピロードで、つま先がとがってプレーヌ風⁴⁷に反り返り、底が厚く、純白で、重ね合わせた紙でできている。

彼らの中に、いずれごく中国的ではあるが、高貴な身分に特有の気品がただよう容貌をした者たちがいる。彼らは僕らが通り過ぎるのを、ある種の驚きの表情を浮かべながら、かすかに皮肉を込めた眼で眺めている。それにしても彼らの物腰は、どこまでも好意に満ちていて慇懃だ。しかし上流階級のそうした柔和で気品のある容貌にも、やはりアジア的な作り笑いがあった。とにもかくにもいまなお生き続けているこの古きアジアと、つい先ごろ生まれたばかりで、すべてを変えてしまった僕らとのあいだには、乗り越えがたい深淵が横たわっているのだ。

ねじれた緑の老木、崩れかけて斜めに傾いた古い屋根、眼のつり上がった中国人の顔——これらにはそれぞれ似かよったところがある。ノアの洪水の頃に開花し、セソストリス王⁴⁸、サイラス王⁴⁹、アレクサンドロス大王⁵⁰、テオドシウス帝⁵¹、そしてシャルルマーニュ⁵²の時代に栄え、西洋ではいくつもの文明が減んではその廢墟の上にあらたな文明が生まれているあいだにつねに成長し

39 翰林。

40 翰林院。

41 吏部。

42 総理衙門。

43 閔帝廟。

44 閔羽。

45 香微（あるいは幽）宮？（正確な意味は不明）

46 象房。

47 <la poulaine>：14、15世紀に流行した先が長くとがって反り返った靴。

48 エジプト王。

49 ベルシャ王。

50 マケドニア王。

51 古代ローマ皇帝。

52 フランク王国カロリング朝の王。カール大帝。

つづけた過去——そういう過去をもつこれらの遺物、これらの残骸——この太古の東洋のすべてが、われらが近代西洋に、つねに同じ老いて謎めいた洪面を向けているように見える。

東洋と西洋はたがいを見つめあっている、あたかもチベットのラマ僧の祈祷輪⁵³が、モールス信号でも見つけているかのように。両者は見つめあっている、侮蔑と憐憫の念をもって。衙門にいるあの大理石の獅子が、エジプトのスフィンクスを見つけているかのように。はたまたオーストラリアの物神^{マスコット}が、宗教裁判所の凄惨なキリスト磔刑像を見つけているかのように。

そして、いたるところ、世界という名のこの雑然たる寄せ集めのいたるところに、人の理性を混乱させる同じようなどぎつい不調和がある、——イスラムの三日月の横に置かれたパールシー⁵⁴の火、日本のプリアポス^{ニ・ボン}⁵⁵であるチンボコ神、ローマ・カトリック教徒が崇める聖体のパン。相対立する謎、混乱する信仰、混沌たる神統記、そしてこの混沌のただ中に、一切を捨象することにより一切を単純化する実証科学から生まれた唯物論が、死のごとく冷ややかにそびえている。

じつにこれらすべて、五千年の歴史をとおして人が崇めてきたすべてのもの、それは神だったのだ！...。そこで僕は、そのこれらすべてに思いをめぐらす。それは、おそらくこれを最後に、あらたな形で、より謎めいて、より不可思議に、より深い闇に包まれて現われてくる。さて、これらすべてのもの、それは無なのだろうか、まったくもって本当に無なのだろうか？ それともそれは、僕らの知力がそれを捉えようとして広がろうとすればするほど僕らからかつてなく遠ざかり、捉えがたいもの、理解しえないものの領域へと入ってゆくのだろうか？

そのとき僕は、ロチ君、君も知るあの悲痛な感覚に襲われるんだ。行ったこともないどこかからの途方もない隔たりの感覚、出合ったこともない誰かとの別れの感覚、いまだかつて見たこともなく、おそらくは知りえない場所、夢の中で住んだか、あるいは前世でおぼろげに、かすかに住んだことのある場所からの追放の感覚に...

——気をつけなさい、ブラムケット君、行列がきましたよ。わきによりましょう、さもないと
 先導警吏^{リクトル}⁵⁶にいいがかります。

と、今度はムシエット神父が僕の思考の流れを断ち切った。

砂ぼこりがたつ。飛ぶようにかけまわり、汽笛のように甲高い声を張り上げる子供たち、ドラを打ち鳴らす垢だらけの男たち、真っ昼間から赤い細帯のついた長い竿の先に提灯かかげて息を切らしている人たち、矛槍兵、黒い胴衣に黒い膨らんだ半ズボンをはいて、高い羽飾りつきの帽子をかぶり、紐なし鞭、鉛を仕込んだ房つき鞭、鎖、その他種々の拷問の道具を狂ったように振り回す先導警吏たち。つづいて、これまた飛ぶように行進しながら、長い柄の先につけた緑の竜、赤い幕、怪獣、怪物を担いでいる人々。

53 回転式の祈祷文の入っている円筒。

54 イスラム教徒に迫られてインドに移住したゾロアスター教徒。

55 ギリシャの生殖と豊穡の神。男根であらわされる。

56 古代ローマで高官を先導した下級官吏＝リクトルから。

最後に、かくのごとき護衛を連れた要人が、みごとな馬具をつけた馬に乗って現われる。渤海副王リ・ホン・シャン⁵⁷が、摂政コン⁵⁸のもとに表敬訪問にきていたのだ。副王はのっぼで痩せている。骨ばった顔は、やぎひげに長い口ひげをたくわえ、抜け目なくも満足しきった様子。中国王族の孔雀の羽が、正式の高い被り物の上にのった赤い玉のうしろで揺れている。

全体が非常な速さで移動する。徒歩の者は走り、馬上の人は跑足で、跳ねて鈴を鳴らし、乱れた長いたてがみを揺らし、人馬ともに長い尾を揺らして進んでゆく。キジ勲章の金板が有力な主君の胸の上で上下に揺れている。高級官吏の袖なしマントが風を切る翼のようにはためいている。——一行が通り過ぎた。——後続の一团が先頭の一团と同じく猛スピードで行進する。馬上の秘書官と書記たちは、みな制帽をかぶり、いかにも偉そうに、肩から斜めに巻紙と文具箱をかけている。つづいて従僕たち、おかしな金ぴかの服を着た顔色の悪い連中——息せき切って駆ける陰気なやつらだ。これでおわり。僕らはさきに進むことができる。

——エクセ・ホモ・ディヴェス・オプム⁵⁹！とウー神父が感嘆している。

——エト・ポテンヌ⁶⁰！とシュウ神父がつけくわえる。

——セド・クルデリス、マルス、ペルディツスクエ・ヴィティイス・トゥルピブス⁶¹！と男性原理は反論する。

——メミニ・メ・マンドゥカビッセ・オリム・アブド・エウム、と僕がひどいらテン語で神父さんたちにいう。ミヒ・デビト・ボヌム・ヴィヌム・デ・シャンパーニュ・ビビトゥ、エト・フィロメラエ・エディトゥ⁶²。

三つの拱門をもつ凱旋門の前に到着。門は血のように真っ赤に塗られ、例のごとく四隅が反り返って怪獣の顔になった屋根をのせている。〈赤都〉への入り口だ。

ここは様子ががらりと変わり、まるで消滅した時代の巨大都市への入場門のようだ。

大通りはこの〈赤都〉をつらぬいて、視線の届かぬはるか遠くまでつづいている。ここには衙門はなく、そのかわり、奇妙な正面の店舗が立ち並ぶ。それらは宮殿のように高く、各戸の脇には、玉や竜の頭や怪獣をのせた極彩色で金ぴかの巨大な支柱が二本ずつ立っている。色と金泥をふんだんに用い、透かし彫りをほどこした大きな木製の化粧板が、それらの支柱どうしをつないでいる。

さらに別種の支柱がある。こちらは車道にかぶさるように傾いていて、荷車や人馬で混み合う道の上にまるで穹窿のように架かっていて、それが延々とつづいている。そこから色とりどりの長い旗が垂れていて、風にゆれ、からまりあってはほどけ、たえまなく動いている。

57 李鴻章？

58 恭？恭親王のことか？

59 編者注「あれは金のある人だ！」

60 同「それに力がある」

61 同「しかし残忍で、悪辣で、けがれた悪癖にふけり身を持ち崩している！」

62 同「わたしはむかしあの人の家で晚餐をとったことがある。彼はわたしにおいしいシャンパンを飲ませ、サヨナキドリの巣を食べさせてくれた。」

路上には、ごったがえす人の波。無数の人やものがうごめき、あちらこちらと、狂った流れに押し流されるかのように移動する。ごちゃまぜの色、なかでも金色が目立つ。際限ない雑多な色の混交、多種多様な色の錯綜。それらすべてが遠くのほうで、明るい霧と一月の朝の冷たい水蒸気の中に消えてゆく。

白っぽいほこりの層が、赤茶けた雲のように、この帝都⁶³の上に漂っていて、それが澄んだ空に向かって上昇し、だんだんと薄くなってゆく。

そして、あの苛烈な気候風土の太陽が、これらすべての上に強烈な光を投じている、——熱帯の太陽と同じくらい明るい、冷たくて、まるで死んだような太陽が。

騒音はひとつに溶け合って、唸るようなどよめきと化す。アジアのあらゆる言語で発せられる喚声、客引きの口上、喧嘩、ありふれた会話。鳴り響く幾千もの鈴、荷車の走る音、馬のいななき。尾羽をエオリアンハーブ⁶⁴のように上下させながら、飛び立ち、舞い降りるハトの鈍い羽ばたきの音、黒い大群となって空を横切るカラスの鳴き声…

そして、冬の風が狂ったように吹き荒れて、モンゴル砂漠の砂をこの巨大な都市の上に、あいもかわらずまきちらしている…

僕らは、先導する馬夫^{マフ}の小さな灰色の帽子を見失わないよう気をつけながら、荷車と人馬で混み合う道をゆっくりと、苦労しながら進んでゆく。馬夫は、障害物があるといきり立って前脚を上げる小馬をもののみごとに操って、のべつまくなしに得意のコー・レ！コー・レ⁶⁵！（気をつけろ！気をつけろ！）を発するが、そのかぼそい声は、砂塵とともに轟々たる騒音に満ちた虚空に消えてゆく。

僕らの通りが別の大通りと直角に交わる十字路で、ときどき歩みを止め、わきに寄らなければならなくなる。延々とつづくラクダの行列を通してやるためだ。鼻面は黒っぽく、長い黄褐色の毛をしたその巨大な動物は、先が割れて、関節が奇妙に折れ曲がった四本の脚でもって、まるで壊れた機械のように歩く。

通りがかりに、ラクダたちの複雑な横顔が見える。口輪をつけて、愚かしく、謹厳で、あきらめたような表情だ。

ラクダを連れているのは、北の砂漠から下りてきたモンゴル人たち。その横に広いのっぺりした顔には、どこか陽気で荒々しいところがあって、中国人のたえざる洪面と気持ちのいい対照をなしている。血のように真っ赤な長い着物をまとい、腰のところを帯でしめ、何丁もの短刀を差している。フード付きの毛皮のキャブリン帽のようなものをかぶっていて、そこに房飾りのついた円錐形の赤いぼんばりがのっている。

僕らは道をつづける——頭上に架かる、ごてごてと塗りたくった大きな宝棒⁶⁶と色とりどりの吹

63 大帝国の首都という意味で「バベル（＝バビロン）」。

64 風に吹かれて鳴るハーブ。

65 不明。

66 菓子などの賞品を上にも吊るした滑りやすい長い棒。祭りなどで参加者がよじ登り賞品を取る。

流しの下を、黄色いチベット人や、白い韓国人や、赤いモンゴル人や、灰色の服を着て修道士のように頭を剃った仏僧や、新年を迎え万国の宗主たる天子のチエンツェ前にコ・ト⁶⁷（朝貢国の民に対し万典の書に定められた平伏）をしにやってきたカルムイク人、ツングース人、キルギス人の使者たちをかきわけて。

あいかわらず跑足で、通りの中央を占める馬と荷車専用の高い土手のようなところをゆく。両側の低くなった二つの道は歩行者専用だ。まわりには、またしても着膨れした金持ちの騎手たち、おびただしい数の青い荷車、ガス灯のカンテラみたいな黒い駕籠に乗った貴婦人たち、貸ロバにまたがる穏やかな面持ちの町人たち、さいごに、タ、タ、タ、タ！ と叫びながら棍棒でロバの尻を叩いて歩くルイ・フ⁶⁸（ロバ引き）たち。

車道より一段低い道の上に、純朴な中国の田吾作とでもいうべき庶民の人ばかりができていて、熊が踊り、綱渡師が芸をし、軽業師がきみわるく体を反らせたりくねらせたりしているのを、あんぐり口をあけて見物している。

せわしなく行ったり来たりしているのは、ひしゃげたちっちゃな鼻に大きな丸眼鏡をかけ、もったいぶって七面鳥のように練り歩く、いかにも中国の金満家といった感じの連中だ。はたまた、いかにも貧乏くさい面をした哀れなやつらもいる。

そして店、店、店。どの店も金ぴかで、豪華で、モンゴルの毛皮や、金銀の絹紋織物、夢にでてくるような不思議な模様の刺繍をあしらった高価な生地、この上なくすばらしい有線七宝や陶磁器など、——想像を絶する過去、とほうもない価値を秘めた色彩豊かな過去の、ありとあらゆる品々を売っている。

それから、人ばかりができていて女占い師たち、台の上でマネキン相手に鍼治療をしてみせている鍼師たち。

そして銀行。そこには従順な顔つきの行員がうじゃうじゃいて、中国人の鋭い長い爪の先で、算盤の繋いだ珠を無我夢中ではじいている...

ロチ——君は例の熊のような毛をしたモンゴル馬にまたがって、そうした店や銀行にも入ったのかい、プラムケット？君の世話役を引き受けた神父さんたちには、いい迷惑だったろうね！

プラムケット——いいや、ロチ君。ただ、皇太后の一行が僕らの道と直角に交わる大通りを通っていた。亡き主君の御霊に生贄を捧げるため、天壇⁶⁹にいっところだった。それで僕らの道が封鎖されていたので、それよりさきには進めなかった。

こんなふうに見えたもの、聞こえたものをひとまとめにされては読みにくい、と君はいうだろう。そんなふうでは想像力の手にあまる、と。たしかにそうだ。北京には細かい部分ばかりたくさんあって、大まかな太い線がない。眼を疲れさせる無数の事物。それを描こうと思えば、それが作

67 磕頭（頭を打ちつけるおじぎ）。

68 驢夫。

69 「中国で、皇帝が都城の南郊で当時の日に親しく天帝を奉祀した祭壇」（広辞苑より）。

られたときと同じくらいこまごまと、念入りに描かねばならない。

北京を大雑把にそそくさと描いてみたまえ、そこにはなにも出てこないだろう。本来重たいものを軽くすることは、そのものの性格を捨象することなんだ。

ごらん、吹きさらしの芝居小屋が並んでいる。旗を背に差し、虎や竜や豹に扮した役者たちが、——仮面の下で震え、冬の風に凍えながら——、悪魔に憑かれたように体をよじり、恐ろしい仏教地獄の場面を演じている。縁日だ。いたるところにおぞましい滑稽さ、中国式の悪魔劇がある、——僕らにすれば、悪夢と恐怖に満ちたエキゾティックな世界の発見だ。

僧侶たちの喧嘩とおめでたい笑い声。ピャクダンの匂い。凍った汚物の山が発するつんとくる悪臭。すべての家、すべての仏前、すべての先祖の飾板⁷⁰の前で焚かれる線香の煙。形、色、音、いたるところに異様な空気が漂っている——猫の鳴き声のように鋭い調子外れの叫び声、かすかに悲しげに軋むギターの音色、音程の狂ったかん高い裏声、金切り声と呻き声の一大交響曲、それを引き裂くドラの音・

そしてついに、ついに現われた。灰色の高い外壁の上に立つ大きな塔と、前方に口を開く黒い深淵、これが西直門^{シー・チエ・メン}だ。

この洞穴に入ろう、ゆっくりと、慎重に、ジンギス・ハーンの孫にして元王朝の始祖フビライ・ハーンの時代に遡る古い敷石の隙間で馬の脚を折ったりしないように。

この醜悪なトンネルをくぐろう、——つぎに中庭を、——つぎに二つ目の塔（虚空にそびえるその四つの外壁は白く、舷窓のような黒い狭間が開いている）の下にある二つ目のトンネルを。大急ぎで駆け抜けよう、群がるシラミのような人間ども、うす気味悪くぞっとするような物乞いのなかを。逃れよう、うるさくつきまとうこの怪しげな連中から。そして出よう、その地獄のように恐ろしい洞穴から。

またしてもラクダたち、またしても薄汚い古い場末のいまにも崩れそうな家々、そして行く手に大平原があらわれる。平地に出たのだ。

やれやれ！...

ロチ——まったくの話、やれやれだ。

ときにプラムケット、君は「カンガルーの胚形成」に関してじつに注目すべき書物を著しているね。じつは、僕はどういうわけか猫のほおに、ひげの下の毛をそっと撫でつけながら接吻するのがたまらなく好きなのだが、君ならたぶん、そのわけを説明できるんじゃないだろうか？ 愛情では説明できない、絶対に！ だって、かわいがっていた今は亡きムムットのほかに、見せられたばかりのどうでもいい猫でも夢中になって接吻するのだから。道端にいたり、窓縁のところに座っている猫でさえそうなんだ。見た目がよくて、汚くさえなければね。

東洋では、僕がこんなふうにするのを見て、トルコ人たちがおおいに面白がっていたっけ。とく

70 位牌？

に友人のアフメット⁷¹がそうだった。

これまで僕はいろんな動物を飼ってきた。世界各地で、人生の忠実な伴侶となり、辛い状況で話し相手になってくれた。みんな大好きだったけれど、接吻するなんて考えは一度だって抱いたことがない。

かつて二十五年ほど前、幼い頃の友達で、フルという名（アッシリア王プル⁷²ないしフルの末裔だというので）の賢い白のグレーハウンドを飼っていたが、なるほど僕はそいつにはよく接吻した。

いまだにフルの姿が目には浮かぶ。ほっそりした小さな鼻、胴は優美な曲線を描き、すうとした長い脚はいつも土を踏むのを怖がっているように見えた。僕がほんの四、五歳の頃、そのグレーハウンドを安楽死させなければならなくなった。狂犬病にかかった大きな犬に噛まれてしまったんだ。

最後の朝、フルは、いつものように僕の小さな子供用ベッドの縁に前脚をのせて、おはようをいいにきた。でも僕は、フルが妙な眼をし、口をあけているのに気がついた。

それから、——おそらく自分が僕にとってひどく危険な存在であることを悟っていたからなのだろう、——うれしそうに僕に飛びついてくるかわりに、尻尾を垂らして、隅のほうにいて、あいかわらず妙な眼、人間が苦しんでいるような眼をして僕を見つめながら、座り込んでしまった。——その日の午後、フルは安楽死させられた。

プラムケット、かつて動物の苦悶と死は、僕の想像力にとって不安の種であり、謎であって、子供時代の僕の信仰をひどく動揺させるものだった…

両親は僕に、プルは犬の病院に連れていったんだ、元気になって戻ってくるよ、といった。僕はその病院の様子を想像し、善良な犬たちがみなボンネットをかぶってベッドに入っている場面を思い浮かべた。僕がようやく残酷な真実を知ったのは、ずっとあとになってから、あのかawaiiそうなフルのことをたいがい忘れてしまってからのことだった。

それ以後、僕は猫にしか接吻しなくなった。

それには特別なやり方があるんだ。親指と人差指のあいだに前足を入れて、その他の指で背骨を支えながら持ち上げる。そうやって立たせておいて、しっかりと接吻してやると、猫は軽く体を振る。そいつがもしとても甘えん坊なら、——たとえばメスなんかはそうだ——にこにこと、しかしながら控え目にほほえんでこっちを見つめる。それほど人懐こくない場合——おおきなオスの場合——は、頭を下げて、不機嫌なもったいぶった様子をみせる。

接吻してやったとき、猫は暇ならそばにとどまって座りこむ。用があって忙しければ、どこかにいってしまう。後者の場合は、お愛想に二、三度こっちを振り返って見ながら、背中をまるめて、優しくに、ちょこちょこと離れてゆく…

プラムケット——失礼じゃないか、ロチ君。そうやっていつも人の話を途中でさえぎるのは君

71 『アジアデ』に同名（=Achmet）で登場する。現実にはメフメド（Mehmed）といい、ロチとは1876年にイスタンブールで知り合っている。

72 紀元前745年頃、プル（Pul）と呼ばれる軍事的冒険家が即位。

の悪い癖だ。話が退屈なら僕を見習って寝たらいい。僕は君が話すたびにそうしてるだろう。そのほうがよほど礼儀に適ってる。

それに君の世間知らずのぶりっこ、そらから子供じみたお話だが、それが世界各地の太陽で肌を焼き、やりたい放題の暮らしをしてきた齡三十一の大人の口から出るなんて、じつに滑稽じゃないかね？

… というわけで話は、モンゴルの小馬を駆って、平地に出たというところだった…

ロチ——ああ！ なんてこった！ またはじまるのか！…

プラムケット——… 一直線に長くのびた銃眼のある北京の城壁をあとにして、凍った小さな水路が大平原に投じられたはがねの針のように陽光にきらめく水田のただ中をゆく。

ところどころ葉を落とした木立があって、弓なりの屋根の白いずっしりとした家々——中国の別荘だ——や、藁葺き屋根の土でできた小さな家々——百姓の農場と住居だ——を囲んでいる。

それらの家々は、畝が霜で凍ったこの平らな海に浮かぶ、絶海の孤島のように見える、——そこに赤い太陽が黄褐色の輝きを放っている。

地平線の彼方に、大きな赤褐色の砂の雲がわき、むきだしの大地の上をかけてくる。ときにそれが僕らをすっぽりとつつむ。するともう視界が利かない。

平原全体が灰色をしている。ここは陰鬱で荒涼とした広大な草原だ。^{ステップ}

馬の脚が速くなり、冬の風の中を疾駆する。

僕らは遠い国にいることをときどき忘れてしまうことがあるが、些細なことが、すぐにそれを思い出させる。たとえば、ヤギの毛皮にくるまった農民たちがそうだ。彼らは通りがかりに、こめかみに向かってつり上がった眼、アジアの果ての国民を特徴づけるあのあやしげな眼を僕らの方に投げてよこす。また、遠くからヨーロッパ人の臭いをかぎ分けて、尻尾を垂れ、怒気を含んだ顔つきでかけ寄ってくる犬たちがそうだ…

この国では、不思議なことに、動物たちでさえ僕らの根本的な人種的差異を感じ取っている。水牛は頭を下げて道行く白人に襲いかかり、モンゴル馬は僕らが乗ろうとすると暴れて乗せまいとする。

白い大理石が敷かれたいくつもの街道が交差する地点に到着、——もはや今日ではその半ば死せる姿しか見ることのできない昔日の中国の巨大な栄華の残骸。ほこりっぽく冷たい空気の中、そこに一本の竿が立っていて、その先に人間の生首を入れたかごが吊ってある。

上に立札が掲げてあった——正義は罪を罰せり。震えおののき、従うべし。

僕らは、立ち止まってこの人物に眺め入る。凍っているので保存状態はよいが、ただ、ミイラのように茶色く変色している。開いた眼が、こめかみに向かってつり上がった二つの白い裂け目をのぞかせている。薄い口ひげに縁取られた唇が、血の滲んだ二条の齒列を耳のところまでむき出しにしている。この生首は笑っているようであり、不遜にも、頭上で木魚のような乾いた音をたてなが

ら風に吹かれて風見鶏のようにくるくる回っている高札の文句を嘲っているかのようだ。

——フォルモシマム・カウダム・ハベバト・イスト・ラトロ（この盗賊はじつに見事な辮髪をもっている）、と、ご自身も大変美しく手入れの行き届いた辮髪をもつシュー神父がいう。

なるほど、生首の長い辮髪はかごの外に垂れ、時計の振り子のように風に揺れている。まるで、罪人の魂が仏教地獄で受けねばならぬ罰の無限の時を計っているかのように。

しかし馬夫^{マ・フ}は、もともと鈍感な人間で、ぶら下がったかごにふざけて一発器用に鞭を入れる。すると死者の頭部は、パチンコ玉のように飛ばされて、硬くなった地面の上を跳ねて転がってゆく。

——ねえあなた、と、この無邪気ないたずらを見て物憂げになったサモルト神父が僕にいう。〈教会〉は耕すべき土地としてわたしたちにお粗末な土地を与えられました。じっさい中国人の脳みそにキリスト教の思想を仕込むのは、じつに難儀なことです…

——でも、と僕は答えた。ウー神父もシュー神父も中国人ではありませんか。あなたと同じキリスト教の聖職者でしょう？…

——あなた、たしかに二人は優秀な聖職者ですが、それでも中国人であることに変わりありません！…

——本当にいい聖職者たちです… とムシュット神父はいう。それにヤン神父だってそうです。みんな礼拝式をたいへん上手にこなします。記憶はよく、神学や教父のことはじつによく知っています。ラテン語だって堪能です。ただ、中国語にない r の発音はどうしても上手くできないようですが。

——それでも、とサモルト神父はいう。彼らが執り行う礼拝には、断罪すべき異教的儀式が混じっていないともかぎりません。ですからわたしたちは、彼らを信者たちとひとりにしておくのを好まないのです。突拍子もないことをされたり、わたしたちの聖なる宗教を中国風に解釈して歪められたりしては困りますから。

その間、ウー神父とシュー神父はにぎにぎしく会話を交わしているように見えた。さかんに手足を動かしたり、鼻からこめかみのところまで細長い小さな眼をカメレオンのようにくるくるさせたり、ときどきたがいの顔を見てどっと笑ったりしていたが、そんなとき彼らの口は耳もとまで裂けるのだった。それがすむと、二人はばか丁寧に長々とあいさつを交わしているようだった。

——彼らは即興で平原の詩を作っているのです、事前に決めておいた韻を踏んでね、とサモルト神父はいう。たとえば、空は大きなトルコ石だとか、太陽は金、月は象牙だとか、あるいはまた、小さな花は見目麗しく馥郁たる香りを放つだとか、完全なる調和が天と地のあいだに現に支配し、今後一千年の一万倍支配するだろうだとか、万事この世が無事なのは、主耶蘇^{イエス}の栄光（ここで神父は恭しく十字を切った）が、地上においては翡翠寺⁷³で、天上においては青玉広場⁷⁴で宣明された

73 不明。

74 不明。

からだとか、そういうたぐいのことをいって、互いに相手を褒めあっているのです…

敷石の道は、むきだしの灰色の平原を横切ってさらにつづく。僕らは大跑足で、いまだ霜でおおわれた、いわば緑樹のオアシス、^{ウアン・シュ・シャン}万寿山にむかう。

瓦礫だらけの穴の前にきた。故咸 豊帝が韃靼虎を飼っていた穴だ。^{ヒエン・フオン}

ロバに乗った農民の男女とすれちがう。そしてとうとう、盛土の向こうの地面すれすれのところに、柔らかい肌色の、鏡のように反射する、大きな水面があらわれる。氷の張った夏宮の池だ（この池は、かつて宮廷のジャンクが行き来していた広い水路によって、北京の宮殿の池につながっている）。——オアシスに入ったのだ。

緑の灌木の茂み。幹が白くて光沢があり、枝が細くて垂れ下がったカバノキ。その下をくぐると、冷たい露と霜の結晶が降ってくる。何本もの手を持つヒンズー教の神々のような格好の松。碎け、割れ、えぐられ、すっかりコケにおおわれたコナラの老木。寄生植物やツル植物が網のように絡まりついて、まるで骸骨のように見える古木や廃墟。

僕らは池の岸に沿って進む。池に張った水が真昼時の陽光に溶けて、そこからきらきら輝く水蒸気が立ち昇り、甘美な光を放っている。半ば溶けた氷に閉じ込められ、身動きがとれなくなった睡蓮や水草が、この平らな鏡の上に奇妙な庭園を形づくっている。

築山と大理石の欄干柱のある向こう岸に、こんもりとした木々の影が見える。その長い線は、ところどころ樅の小道で途切れており、そのいかにも芝居がかった眺望は、遠くのほうでかき消えている。

ここかしこ、黒っぽい杉の群木をのせた小島が浮かんでいる。木々の水平に伸びた枝が黒いジグザグ模様をなし、陶製の優美な物見櫓がうららかにそびえている。

甘美で詩的な冬の夢——コロエ風の夢。いわば北のまほろば、ほんやりと霞むベールに覆われたエデンの園、空想された自然、自然でない自然のえもいわれぬ魔法のあらわれ。近寄れば消えてなくなるにちがいない蜃気楼…

橋げたが十八もある大きな橋があって、それが、巨大な大理石の上につくられた端正な形の築島に架かっている。橋そのものも、美しい白大理石でできていて、数世紀来夏の太陽の光を受けて金色に染まっている。それは一個の巨大な円弧であり、その湾曲した背が、いままさに飛びかかろうとする二頭の大獅子のあいだに見えている。

長い毛のじゃじゃ馬たちが、やにわに前脚を上げ、後脚で立って、首をでたらめに振りながらワルツを踊りはじめる。

——タ、タ、タ、タ⁷⁵（僕らの言葉でいえば、はいっ！）、と叫びながら、馬夫が黄色い悪魔のごとくに奮闘し、鞭を振るい、手綱を締め、拍車を加える。すると、彼が乗る小熊のようなじゃ

75 不明。

じゃ馬は、大理石の橋の上で、ほどよい狩猟駆歩にもどる。モンゴル馬の一隊も、先頭馬にしたがって、御影石の美しい凱旋門——その台輪の湾曲した先端は、いかにも中国らしく優雅に天に向かって反り返っている——に向かってゆく。拱門をくぐりぬけると、ばら色の壁に囲まれたばら色の亭に入る。万寿山の入口だ。——目的地に着いたのだ。

ここで下馬し、荷車から食糧と男性原理を降ろさねばならない。ここからは徒歩で、大理石や陶器の散らばる大きな中庭を横切り、黒焦げの木の幹、崩落した屋根、壊れかけた壁の中をゆく。——ここは宮殿の墓所だ。

前方に、薄暗い巨大な樅の並木道がある。樅はかぐわしい香りを漂わせ、大ぶりの枝が、樹氷に覆われてたわみ、重そうに垂れている。

そしてついに万寿山そのものに到着、——ばら色の漆喰で仕上げた二段の高い築山からなる、その切り立った側面が見える。

重なり合った二個の菱形模様に見える二列の坂路を登ってゆく。途中、一箇所踊り場がある。

——さあ、登りましょう！ 登りましょう、パテル・ヤン⁷⁶！ がんばりましょう、ムシエット神父！ マクテ・アニモ、パテル・ウー⁷⁷！ パテル・シュー、チュアン・クエ・ツエ、チャン・チエン・タン⁷⁸！（シュー神父、中華帝国の子、天まで昇りましょう！）。

… なんてひどい坂路だ！ 崩れた段々が瓦礫の山に埋もれて見えない。宮殿が頂上から雪崩のように転がり落ちていったのだ。

なんてひどいありさまだ！ まるで陶器と、大理石と、磁器の墓場のようなだ！ モンテ・カルロの坂をばかでかくしたのを思い浮かべてみてくれ。そこに、頂上から、セーヴル磁器⁷⁹やヴァロリス陶器⁸⁰、それにカンパーナ美術館、古代人ギャラリー、アテネのアクロポリスを粉々に砕いてばらまいたかのようなのだ。

——フランス軍砲兵隊のしわざです！ と、すっかり息の上だったムシエット神父が、自慢げに胸を反らせていう。

手足のもげた大理石の獅子が、口を瓦礫の中に突っ込んでいる。まるで死に際の痙攣に襲われて、しゃにむに陶器のかけらに噛みつこうとしているかのようだ。それから、いくさで鼻をなくしたしし鼻の象が、背中に廃墟と化した九重の塔を載せている。そして片翼を失った不死鳥、手足をもがれた怪獣、いざりの竜…

登ろう、登ろう、足もとに転がるこの高価ながらくた、残骸の山を踏み越えて。男性原理は、荷

76 ヤン神父。

77 「がんばりましょう、ウー神父！」

78 中国子、上天堂。

79 セーヴル焼きで有名なバリ南西郊の町。

80 陶器の製造のさかんな南仏の町。

車引きと馬夫に支えられ、力なくうめいている。パテル・ウーとパテル・シューは、諦めた様子で喘いでいる。可哀想な神父たち！…

ようやく頂上、つまり上段の築山の上に達する。二つ目の凱旋門——石膏のアーチが三つあり、見事な浅浮き彫りが施されている——をくぐると、二重の塔が前方に、大理石の土台の上にどっしりと、立ちはだかるようにしてそびえている。

塔は、壁に黄色い陶製タイルが張っており、それが大きな市松模様をなしていて、どのます目にも翼を広げた不死鳥が描いてある。反り返った屋根には、中国風の奇怪な装飾物が立ち並んでいる。

その向こう、打ち捨てられ、ひっそりとした庭のずっと奥の方に、大理石の土台の上に立つ青銅製の愛すべき小さな亭があって、それが、ヒイラギやイバラやツル植物が絡まりあう雑然と積まれた人造石のなかから立ち現われる。さて、ロチ君、君の友人プラムケットはだね、その亭で、この極東のニネヴェ⁸¹の廢墟に囲まれて、五人のローマ・カトリック・使徒教会の聖職者——その一人が世界生成男性原理——からなる風変わりな会食者とともに、教会風美食の午餐を取るようになる。

この中国の至宝は、西洋からもたらされた荒廃のものともせず、その優美な金属製の小円柱、透かし模様入りの羽目板、ツルやシダが垂れる重なり合った屋根を、薄青い空にそびえ立たせている。

ここで茶を飲むのは、——天の子であり、万国の皇帝であったなら——、さぞかし気持のいいことだろう、——うぶな表情のかわいらしい娘たちを一ダースばかりはべらせて。白粉をし、紅をつけ、大ぶりのかんざしを挿した豊かな髪 of 女たち、派手な着物に身を包み、おっきな腹、でっかい腰に、ちっちゃな足をして、われさきに主君の寵愛をえようと競い合う女たち…

この男、天の子であり、全能かつ不可視で、ヘリオガバルス並みの贅沢にふけるこの人物は、永遠不滅の孔夫子⁸²による思慮深くもじつに愚かしい教えに思いを馳せつつ阿片を吸ったり、あるいは、おのれの持ち物であり、おのれの欲望を満たすべく巧みに訓練された、その一群の女たちの色香に身をゆだねたりするのだった。

まぬけな顔の娘たち、おっきな腹、でっかい腰に、ちっちゃな足をしたこの娘たちは、この男の眼にはみなヴィーナスのように映った。じじつ彼は、来るべき夜の逸楽に思いを馳せ、満足しきって、にやりと笑みを浮かべるのだった。

そして、ここから見える風景、——しきりに瞬き、涙にうるみ、なかば閉じて、阿片と遊蕩のやりすぎで、なかば死んだような彼の眼の前に広がる風景は、どれほど美しかったことか！…

手前には、はるかな高みから見下ろすように望まれる薄暗い森。眼下に広がるその大きな緑の塊から、松や杉のこずえが突き出ている、杣道が見え隠れしている。ここかしこ窪んだところに、絡まりあう枝のあいだから、凍った水溜りが光っている。

81 古代アッシリアの首都。

82 孔子。

つぎに、それらすべてが底なしの深みを思わせる水蒸気のなかに溶け入り、まぎれてしまう。色のない遠景は、まるでちぎった綿か、重さも輪郭も形もない浮遊物でできているようだ。そして、低地に漂うかすみの上に、まるでそこに鎮座しているかのように、無数の切り込みのある山脈、モンゴルへの入り口にあたる山脈が、真昼の太陽の下、まばゆい雪に覆われて、おごそかにそびえている。

ロチ君、かくのごとき風景を眺めるには、享楽を好み、阿片に酔いしれた皇帝の眼をもたねばならない。

そして、それを艶やかな漆の上に描くには、色合いの種々微妙に異なる金粉を用いねばならない。

自然色を使い、並製の画布に厚塗りする西洋の粗雑な風景画家たちは、僕の眼がそこで青銅の羽目板の切れ込み越しに見たものを表現することなど、けっしてできないだろう。彼らは、現実をあまりに完全に写し取ろうとして、不完全なだまし絵しか描けない。

初歩的で、漠然とした、色を用いない絵、中国的想像力にまかせ、遠近法によらず、ざっと描かれた風変わりな絵だけが、かくのごとき光景に固有の情趣を、心のうちに呼び起こすことができる…

——マンドウカウス⁸³！ と、男性原理が、そのちょっと鼻にかかったような声で叫ぶ。

——あなた、食卓について！ と、サモルト神父がいう。

そこで僕らは、皿に、フォーク、ナイフ、そして箸をのせたテーブルクロスを囲み、椅子代わりに敷いた毛皮の上に腰をおろす。

節約家の神父の、なんたる大盤振る舞い！ 料理系の修道僧の、いつにない腕の冴え！ ワインはボルドー、本物のボルドー、シャンパンはヴォージラール街の本店から直接取り寄せたモエ・エ・シャンドン。これに冷製野禽獣肉の煮凝り添え、そしてトリュフ入りのパテ。

——ニ・チェ・ファン・シェ・プ・シェ⁸⁴？（君、ご飯、食べたか、食べていないか？）と、だれか午餐を取った者がいるか否か、中国語で尋ねられる。

ヤン、ウー、シューの三神父は、自分たちの分をむさぼるように食べる。というより、茶碗からじかに、その分厚い唇にはこび、箸でもって口の奥に押し込むように、ぱくりと食らいつく。

ボルドーワインとモエのシャンパンに加え、韃靼人の娘のほっぺみtainなピンク色の、甘ったるい北京の安ワインが出される。こいつがあんがい強くて悪酔いする。しかるに無邪気な神父たちは、警戒もせず、全部いっしょくたに飲み、不用意にちゃんぽんする…

ロチ——気をつけたまえ、プラムケット、君まで酔っ払ってしまうぞ。

君が具合悪くなってしまったら、ねえ君、たいへんなことだ！ 北京から鍼灸師を呼んでこなねばならなくなる。そしたら君の体はハリネズミみたいにされてしまい、わけのわからぬ薬を飲まされる。まだ卵を産んでいない若い二羽の白い雌鳥を生きたまま吉日の「夕」星が「災⁸⁵」座を通過する瞬間に嘴と足と羽もろとも白で挽いたもの⁸⁶、などといった代物をね。

83 「食べましょう」。

84 你吃（？）飯吃不吃。

85 実在の漢字か否か不明。

86 この閉じるかぎカッコ（J）に対応する、開くかぎカッコ（F）が付されていない。

プラムケット——軽やかで甘美な酩酊だよ、ロチ君。——僕は自分が中国皇帝になったような気がした。まわりにはちっちゃな足の女たちが、意味不明の歌を合唱しながら踊っていた。

彼方では、モンゴルの山々も、ドラの音に合わせて冬の青白い霧の中をくるくる回っていた。距離の感覚がなくなっていた。ずっと向こうの峰に座っている黄色い竜が、何本もある脚を亭までのばして、その鉤爪でもって亭の青銅を打ち叩いては、ぱらぱらと雷のような音を立てていた。

竜どもは僕のいいなりだった。やつらがうろこに覆われた体でところかまわず巻きついて、形を変えたり、大きくなったりするのを見て、僕は思わずほほえんだ。

ほっぺに白粉と紅を塗った韃靼人の娘たちは美人だった。緩慢に、人形みたいな機械的動きで踊っていた。幻のように、すこし透きとおっているように見えた。けれども、こめかみに向けてつり上がったその黒い眼は、自然ならざる未知の悦楽の予兆を秘めていた…

それらが突如、僕の帝国の夢想とともに消えてしまった。一陣の北風が吹いて、冷や水のように頭上を過ぎていった。遠方に見えるモンゴルの山々は白い霧に包まれて不動の姿を見せていた。あの一群の娘たちはどこかと、あたりを探してみると、あれまあ、だれもない！ 神父たちのほかにはだれも…

それに、まあ、なんてありさまだ！

男性原理は、眼を充血させ、真っ赤な顔をして、裸婦の門または陽気な不死鳥の歩みと呼ばれる典礼舞踊を、熊みたい、に、ぎごちなく舞おうとしていた。

シュー神父は、両腕でリズムをとりながら、こぶしを握り、親指を立てて、モ・リ・ファ⁸⁷、つまりジャスミンの花という中国の流行歌を歌っていた。

サモルト神父とムシェット神父とウー神父は、はげしい神学論争を交していた。

サモルト神父——「ムシェットさん、もう一度いいますが、これはオリゲネス⁸⁸自身の言葉なのです。サンクトゥス・スピリトゥス・エム・イムプレグナヴィット・ペル・アウレム⁸⁹…」

それから彼らは、煉獄で待ち受けていそうな魂の責め苦を数え上げ、サモルト神父などは、いかにもイタリア人らしい想像力の高揚にまかせて、そこにダンテの地獄の圏⁹⁰をつけ加えた…

ヤン神父が割って入って、「君、ご飯、食べた、食べてない？」とオウムみたいな口調でいう——フランスでいえば「ピーチャン、オヒルタベタ？」といった具合に。

87 茉莉花。

88 初期キリスト教神学者、ギリシャ教父。

89 「聖霊は彼女〔＝処女マリア〕を耳から孕ませた」（典拠未詳）。

90 『神曲』『地獄篇』より。地獄に九つあるとされる「圏」（<cercles>「輪」）のこと。

ウー神父	}	ふたり同時に中国語で	}	老子は
シュー神父				水は

{ 道において煉獄のことも地獄のことも語っていない。人は二つの性質をもつと教えて
湿っぽく、降り下る。その味は塩辛い。火は燃え上がり、立ち昇る。その味は苦い。

{ いる。火の原理を遺伝によって受け、含む物質の原理。人間がその伝達手段にして媒
木はたわみ、もとに戻るが、その味は酸っぱい。同じく、謹厳で威厳のある態度は尊

{ 体であるところの知性の原理。我々はあまたのもの、そして地獄、そしてその他のも
敬を生み、明晰で判明な視覚は知恵を生み、注意深い聴覚は熟達を生む。雨はよき行

{ のに対する疑念の中に生きている。けれどもあいまいな問題は、蒸気の形成と消散に
為のしるしで、寒暖はよき統治のしるしである。暖は君主の完璧な知恵を、寒はその

{ よって、焼いた亀甲の色によって、不易の兆しによって容易にそれを解決しうる...
公正なる裁きをしるす。絶え間なき風はといえば、それは完璧さを告げる...

.....

しばらくして青銅の亭に静寂がもどる。馬夫の手を借りて、眠り込んでいる神父たちに、かいが
いしく外套と毛皮をかけてやる...

お眠りなさい、神父さま！ さても、いつしかあなたがたが本当に眠りにつく日がくる、そして、
なにものも——神秘の不死鳥の舞も、仏陀の天上の銅鑼の合図も、最後のラッパの音も、キリスト
のいまわの声も、もはやあなたがたを目覚めさせない日が...

さて、ロチよ、眠気をはらいたまえ、これでもう僕の話はおしまいだ...

ロチ——ああ！ ——いやはや君の中国譚は、大山鳴動してネズミー匹式だね、プラムケット君。
それにじつに悪趣味だね、その酔っ払い神父たちは。思うに、反教権主義の書店が出す安っぽい連
載小説は、君の話をモデルにしているにちがいない...

さて君、まわりの話によれば、僕は、ちっちゃかったころ、気が塞いだりすると、つぎのような
苦々しい幻滅の言葉を口にしたのだそうだ。「毎日毎日、起きて、寝て、まずいスープを食べるの
繰り返ししか！...」（プラムケット、僕はむかしスープが嫌いだったんだ、出されるのはもちろん、
いつだって最高に美味しいスープだったのに。）

もしこの話が信頼できる人たちから聞かされたものでなかったら、僕がまさかそんなに早くから
人生を達観していたなんて、容易には信じられなかっただろう。

後年、スープなしの日や、前の晩徹夜したので起きなくていい日もあった。けれども——たぶん愛は別にして——この世に生まれてすぐ垣間見たその倦怠よりましなものなんて、めったにお目にかかれなかった...

君はいろいろ文句をいうが、ごらんの通り、僕はいつも子供時代の思い出話に戻ってしまう。それはつまり、僕の黄色い花を君の花よりは少しばかり生气のあるものにしたいからだ（僕らの花束が古びた植物標本に見えてしまっては困るのでね）。そこで、自分の人生でなにかしらいまだに新鮮なものを見つけ出すために、ずいぶんむかしまで記憶をたどらざるをえないというわけだ。

僕はね、プラムケット、幼い頃、温室の珍しい小さな花のように育てられたんだ。長じて僕は灌木の叢林、いばらの茂みとなったが、それは万人の予想に反し、あらゆる公算に逆らうことだった。

かつての僕がそうだった、ごくおとなしい子供の物腰、外見、抑揚——さらには印象を、いまなお難なく思い出すことができる。僕はそこに、僕の渡り鳥、ニヒリスト、エゴイスト、野蛮人としての感情を混ぜる。僕はあらゆるものの混成物だ。僕がときに少しばかり愛されたのも、そうだ、そのせいかもしれない、——女というものは、いつも自分たちの理解できない男を好むものだからね。

大人となったいまの僕の兆候は、かつての子供だった僕のうちに、すでにかなり早い時期からあった。——そのころの僕は、ほかの子供たちから遠ざけられて育ち、悪と人生に対する極端な無知のなかに置かれ、——純粹無垢で、夢想と自然観察に明け暮れていた。

六、七歳の頃、海辺で、砂浜に横たわる小さな蜥蜴のように、お日様の下で寝そべっていたのを、いまだに思い出す。水平線をゆく遠くの帆船の向こう側に、もしかしてアメリカが見えないだろうかと、晴れ渡る空の下、眼を見開いて見ていた...

ああ、太陽輝くあの遠い国々、あの熱帯の樹林、——かつて僕はそれを夢に見た、——何時間も何時間も、だれもいない森の奥でひとり... あの熱帯の自然が彼方から投げかけてよこすのは、魅惑であるとともに、いわく言いがたい憂愁だった。

また、こういうことも思い出す、——これは、もしだれかそれに気づいていたら、おおいに憂慮すべき徴候だったろう、——暖かい布団にくるまって白いベッドに寝ていると、通りで、海の向こうの遠い国から戻ってきた水夫たちの陽気な喧騒、にぎやかな歌声が聞こえてきて、それに妙な胸さわぎを覚えるのだった。僕は、その荒々しい歌声に耳を傾け、それがだんだんと遠ざかってゆき、港に隣接する下の界限に消えてゆくのを聞いていた。そして、寝つけないまま、あの日に焼けた男たちがやってきた国々のこと、かの地での生活、彼らの冒険に思いを馳せながら、とほうもない夢想にふけていた。——僕の頭の中で起こっていることを、いったいだれが想像しえただろう！...

それらすべてに、禁じられたこと、不可能なことの魅力があった。僕がけっして親もとを離れないだろうこと、そして「世間の役に立つ」人間、ごく堅実で、穏健で、謹厳な人間になるだろうことは、当時はごく自明のことであったし、僕自身もそう思っていた... 長じて僕が、夜中に歌をう

たい、夜っぴて浮かれ騒ぐ厚顔無恥な連中の先頭に立って、彼らの疲れ、冒険、喜びを共有することになろうとは、いったいだれに予想できただろう…

ある夏の日のこと、六月の猛暑のなか、僕は楽譜入れを小脇に抱えて、ピアノのレッスンを受けに、おとなしく歩いていた。たしか十二歳頃のことだった。ひとりで町に外出させてもらったのは、そのときがはじめてだった。城壁の小道をたどって日陰を歩いていた。そして、灰色の欄干越しに、陽光が降り注ぐ静かな平原、地平線の彼方に見える森を眺めていた。

城壁の上にはだれもいなかった。もとより真昼の暑い時刻にはあまり人気のない場所だ。ところがそこに、見習い水夫がふたり、土手の陰からあらわれた。手持ち無沙汰にちょっと歩いてから、ニレの若木にもたれて地面に座り込んだ。ふたりとも子供だったが、僕より少しばかり年が上で、すでに潮焼けで褐色の肌をしていた。

「ブラジルのサル公め！」と、背の高い方がもう一人の耳を引っ張っていった…

ブラジルのサル！… ブラジルという言葉聞いて、僕は夢見心地になった、——そして地平線の彼方、日に照らされた森のほうを見た。すると頭の中を、原生林の名状しがたい直観というか、謎めいた記憶のようなものが通り過ぎていった… この見習い水夫たちは、それを口にするからには、きっとブラジルにいったことがあるんだろう…僕はふたりの話をもっと聞きたくて、彼らのうしろでおずおずと立ち止まった。

ふたりは僕を見て、やにわに話しかけてきた。僕の着ていた服を頭のとっぺんから足のつま先までじろじろ見て、それが彼らにいくばくか敬意を吹き込んだらしく、はじめのうち彼らは控え目だった。けれども僕は、彼らの質問に、どこか暗に冷やかすような調子があるのを感じていた——大海原にゆられてたくましく育った自由な子供が、かごの中の珍しい小鳥のように隔離され甘やかされて育った子供に対して抱く憐憫と皮肉。そして、僕にはない彼らのきっぱりした口調や大胆な物腰に驚いていた。

案の定、ふたりはブラジルから戻ってきたところで、食べるとうまいでっかい果物や、緑色のオウムや、黒人や、サルの話しをしてくれた。

そこで僕らは、彼らの艦がつぎの遠征から戻ったらまた会うことを約束して、なかよく別れた。

ふたりは名前を教えてくれた。背の高い方はバラゼールといった。——十年後のある夜のこと、僕はラ・プラタのいかがわしい場所で彼に再会し、警官とナイフでやりあっているその男が彼だとわかった。さらにその後、偶然のめぐり合わせで、ある日、彼の遺体を海に葬る役をつとめることになった…

その日、僕はピアノのレッスンに遅刻した、——走ったあとで汗だくで、——見習い水夫たちと知り合いになったことにひどく興奮し、——ブラジルを、巨木を、緑色のインコを、そしてサルのことを考えながらの稽古。さんざんのできだった。

その日のレッスンは、時期尚早だったが、その頃習いはじめたショパンで、弾かされたのは

C・ロボ嬢に捧ぐ即興曲第一番⁹¹だった。さて、その結果、僕にとってこの曲のなかには、いつもブラジルがあるということになった。それを僕は、先生流にではなく、どうしても自分流にしか理解できなかった。そしてそれを——僕がまだ音楽というものを受け入れていた時期のことだ——弱音で、極端に速く弾いてしまうのだ。僕の耳には、あの漠として妙に訴えるような調子のささやきのうちに、原生林の木々に降りそそぐ暖かい雨の音、竹の葉のすれあう音が聞こえるのだった。

そのブラジルをはじめて見たのは、十八のときだった。

着いたのは夜中。早朝、艦が停泊していた湾の奥に上陸し、丸木舟で小さな川をのぼって、この未知の自然のうえに陽が昇るのを見た。驚いたのは、木々の葉の緑色の濃さであり、土の強烈な褐色、空の金色の色合い、——そしてさらに、あらゆるものが発するとてつもない匂いだった。巨木や、やしの木のかたちは予想していたとおりだったが、あの色の強烈さや、芳香、空気の重さはそうではなかった。かの国は、僕の五感めがけて一斉に未知の印象を放ってくるのだった…

赤いトキの、朝日に映えてさらにいっそう赤くみえる群れが、僕の頭上を、まるで火の帯のように過ぎていった…

投宿した農場主の小屋で午餐をとった。それから真昼のひどい暑さがおとずれた。戸や窓が全部閉められ、日が落ちるまでは外に出るのは論外だといわれた。

しかし僕は、外に出て駆けまわりたいがなかつた。そこで、音をたてずにこっそりと、同行者が眠っているあいだに戸を開けて、まんまと小屋を抜け出した。

つぎの瞬間、僕はひとり、奇妙な静寂と疲労感につつまれ、きらめく陽光の下、猛暑の中にいた。あたり一面、花をつけた、どれも似たような大きな植物で埋め尽くされていて、その淡い黄色の花が、暑さでまいってしまったかのように垂れ下がっていた。——綿畑だった。

コガネムシのような光沢のある緑色の羽をもつ、ちっちゃな生き物が、この黄色いアオイ科の花の上を飛びまわっていて、高速ではばたきながら、シャクガ科の昆虫みたいにぶんぶんときるような音を立てていた。——ハチドリが昼の食事を取っているところだった。

うちのめすような太陽の下、こめかみのあたりが焼けるように熱いを感じながら、僕はなおもこの綿畑の中をつき進んでいた。——板塀のところにたどり着いた——近隣の森に住むけものたちが夜間、農場に入り込まないように丈夫に作られた板塀。よじ登ってその囲いを越えると、原っぱに降り立った。

そこは一種の林間の空き地で、遠くに緑の木々が立ち並んでいた。——ところどころ、ここかしこに立っている喬木が、僕をうちのめす灼熱の陽光を気持ちよさそうに浴びていた。——それらの木々は、驚くべき緑色をしており、その厚い葉はツバキの葉のように光沢があった。——マホガニーに、黒檀に、紫檀。——地面には、草花やちっちゃな植物が、さっきまでとはちがう新たな様相

91 即興曲第一番変イ長調（1837年）、カロリーヌ・ドゥ・ロボ伯爵に捧ぐ。

を呈していた。この原っぱ全体に昆虫の異様なざわめきが、軽やかに、果てしなく響いていて、いたるところから一斉に聞こえてくるようだった...

さきに進むにつれ、木々はより美しく、より密になっていった... いまやそれが、高い厚みのある一個の穹窿をなし、その下が教会の内部のような空隙と暗闇になっていた... それは、夢にまで見た理想の森だった。

あたりは薄暗かった。青みがかった光の帯が、巨大な幹に沿って降りていた。奥の方は、ギョスターヴ・ドレが描いた森のように黒かった。大地はむき出しだった。枝や根はむき出しだった。葉はぜんぶ上のほうに集まっていて、厚い丸天井のように密生し、その下は、敷き詰められた枯葉のうえを、じゅうぶん自由に歩き回ることができた...

とつぜん乾いた枯葉のなかでなにかがずっと動いた、——長くて、鞭の紐のように身をくねらせるなにか... おお！大きな蛇が僕を見てびっくりして、すぐ近くを通過していったのだ...

この場所の孤独と壮麗さに心地よい感動を覚え、マホガニーの大きな根のうえに腰を下ろした。——頭上には、つる性のランが、蠅の形をした、日陰の花特有の淡くて繊細な色合いの見事な花を、ピンクの房状に密集させて、これ見よがしに咲かせていた。——まわりには、羽にぎざぎざの切れ込みがあり、銀の滴をちりばめたような浮き出た模様のある、小さな白い蝶の群れが舞っていた、——この森の永遠の暑さと闇のなかで孵化した、めずらしい小さな生き物たち...

ねえプラムケット、いずれ僕らの能力は、どれも少しずつ衰えてゆく、——なかんずく、僕らがふたりながらもっていた、ありとあらゆる新しいものに感動する能力はそうだ。——いまなら、僕はまちががなく、あの銀の滴を散りばめたような模様の小さな蝶々にも、人生の最初の時期に僕の記憶に刻み込まれたあの自然界のあらゆる微小な細部にも、もはや注意を向けることはないだろう。

あの森の中で、あのマホガニーの根っこに腰を下ろしていたとき、僕はまるで夢のなかの情景のように、子供の頃、楽譜入れにショパンの即興曲を抱えて通ったあの城壁の小道を思い出した。——そして、ふたりの見習い水夫のことも思い出し、大きい方が小さい方に向かって「ブラジルのサル公！」と言う声を聞いた。

あたりを見回しても、サルは見当たらなかった。——たぶんどこか木の上で眠っていたんだろう...

それからね、プラムケット、僕はなんと、以前に話した古い壁のことを思い出したんだ、——あれだよ、むかし僕が南仏の夏の焼けるような暑さのなか、野原や、太陽の下でまどろむ森の大きな檜の木を眺めに、よく登りにいったラ・リモワーズの壁、ツルや葡萄の枝が絡まるあの壁のことだ、——灰色のトカゲに青いバッタや、ピンクのバッタ、ブンブン唸る羽虫、マスカットの食べ過ぎで気を失い、足を上にして転がり落ちている大食漢のスズメバチといっしょに、熱帯の森を夢見たあの場所だ。

ブラジルの正真正銘の森の奥から、プラムケット、僕はあの壁のことを、そして、刺すような悲しみの中で、消え去った子供時代とそのころの夢をありありと思い出したんだ。

そのとき僕は理解しはじめた、僕らが大人になって世界から与えられる現実的なもののなかには、なにも、自然についても、愛についても、なにひとつ、—— 幼年期の漠然とした魅惑的な観念、いわば直観に応えてくれるものはないのだということを...

プラムケット——ロチ君、いまの花はおおいに気に入ったよ。死ぬ前によろこんでその匂いをかがせてもらおう。じつをいうと、僕は死期が迫りつつあるんだ。君のもとにこれが届くときには、僕は死んでしまっているだろうが、それにはまた別の意味がある。君があまりに退屈なとき、僕の魂はよろこんで君の話し相手になりにくるだろう。ただ、はたして悪魔がそれを許してくれるかどうか。あいつは君にバレス爺さんの魂を取られたことを恨んでいるだけに、どうだかわからない。

敬具

故プラムケット

追伸——ことが遂げられた旨を君に告げるべく、数行を書き加えよう。

死ぬことは単純かつ自然なこと、さらにいえば、心地よいことだ。

残念なことに、死んでしまうと、もはや退屈しなくなる。ゆえに、もはや倦怠の花もなしだ。それゆえ君のうつくしい花束は、君ひとりで作りつづけてくれたまえ。僕の墓にバラの花びらを散らしてくれたまえ。バラは僕の好きな花なのだ。

追伸其の二——葬式はじつにすばらしかった。大勢のひとが僕を、僕の終の棲家まで見送ってくれた。奇跡が起きた！ 教会を出ると、僕は生身の人間のように、長く白い喪裾のドレスを着た若い娘と腕を組んで歩いていた。会衆の表情に過度の悲しみの色はまったく見られず、玄関で僕らを待つ車には、ふだん霊柩車が示す暗い感じがすこしもなかった...

追伸其の三——こんな具合に死ぬ人は多く、その数は増えている。かくのごとくに死ぬこと、それは生き返ること。それに、いずれ君も僕のもとにやってくるわけだ。

ロチ——ああ！ まったくひどいやつだ... いったい何をしでかしたんだ？...

まあいい、親愛なる友よ、君は達者でくらしたまえ。

でも、僕のほうは、これからもおのれの倦怠をひき連れて世界中を駆け巡るつもりだ。それを打ち明けられる相手もなしにね！

まったくの話、これからは君がいらないのだと思うと、ほんとうに寂しいよ...

（完）

2005年10月25日提出